

剣聖の異世界転生録～りりなの編～

白の牙

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

第2の生を貰った男は大切なものを守るために組織、国を敵にし、死んだ

第3の生で異世界にいる神を倒し、(不本意ながら)神殺しの異名を授かり

第4の生で第2の生と同じような死に方をし、第5の生に行く…はずだったが、その世界は過去の世界で気が付けは子供の姿で本来の世界に再転生した!?

どーも白の牙です。この小説を飛天を継し男のリメイク作品で、現在休載しているリリカルなのはの小説の要素を少し混ぜた作品です。楽しんで読んでいただけるよう頑張っていきたいと思えます

1月22日 タイトルを変更

5月27日 タグ及び、投稿した話の編集が完了

目次

プロローグ	1
目覚め	5
把握	8
散策にトラブルは付き物↑それはお主だけじゃ by神	11
烈風	13
目には目を歯には歯を痛みには痛みを	18
夜の一族	23
ありふれた日常	27
日常が崩れた日	31
さよなら日常、こんにちは非日常	34
一度起きたことは、立て続けに起きる	39
ボールは友達・・必殺の・・	42
穿つ閃光	45
異空間での特訓	51
迅雷	55
温泉旅行	60
真夜中の戦い	64
暴発	67
魔力の結晶	72
ありふれた日常2	75
あり得なかった再会	80
あり得なかった再会・2	86
好敵手との試合	90
親ばか襲来	95

少女たちの特訓	98
本気の勝負	103
いまさらながらの設定	111
説明会	115
出会いがあり、別れがある	118
八葉対御神 その1	122
書の日覚め	126
騎士達との語らい	129
騎士たちの今と、昔話	133
剣聖対烈火の将、数百年ぶりの手合わせ	137
再会と新たな波乱の幕開け	143
襲撃・1	147
襲撃・2	154
集う者達	157
仮面の監視者との戦い	160

プロローグ

「何度も何度も、しつこい連中だな」

寄りかかっていた木から離れた青年は遠くから聞こえてくる声にあきれながら森を歩く

「いうことを聞かないなら実力行使つか。だから政府つてのは嫌いなんだ」

森から出ると、武装した集団ががぜんに広がる

「『剣聖』 氷室悠一、これが最後通告です。私たちとともに来なさい」

「トップの誰かが来るとは思ってたはいたが、よりにもよっててめえか赤座。地獄のどん底まで落ちたつていうのにまた上がつてくるなんて大した執念だ」

「ぬふふふ、一度蜜の味を知ってしまうとまた味わいたくなるものでしてね。さて、もう一度言います我々に従いなさい。そうすれば今までのことは帳消しにし、貴方の奥方や子には手を出さないと誓います」

「・・・そうだな・・・じゃあ答えよう。俺の答えは・・・」

「っ!？」

「これだ」

青年は男との距離を一瞬で詰めると握った刀を振るい、男を斬り裂いた

「二度とはいえ、お前たち政府は俺の大事なものに手をかけた。まあ、ぎりぎり俺が間に合ったから未遂で終わったが・・・ともかく、そんな奴らの言うことを聞く義理は俺にはない」

「いいいのですか？ 私たちに、歯向かう、ということとは、この国に歯向かうということ、この場を、退けられたとしても、貴方たち、家族に、待つのは、絶望だけなのですよ?」

深く斬られたせいかな男は過呼吸をしながら青年を睨みつけいう

「あいつらなら俺が最も信頼する人のところに送った。たとえば俺がここで死んだとして何の問題もない」

そういうと青年は抜刀の構えをとる

「覚悟ができた奴からかかってこい！」

こうして青年対組織の戦いが始まった。熾烈を極める戦いだとその場にいた誰もが感じたが、予想とは反し、青年はわずか半日で集団を壊滅させた。それから1か月、次々とやってくる刺客たちを倒し、組織はある2人を青年にぶつけることを決めた

「成程、化け物には化け物を・・・か。まあ、道理だな」

「・・・氷室さん」

「1か月も戦い続けて傷があまりないなんて、相変わらず化け物じみてるわね」

「つは。闘神リーグに比べればかわいいもんだった。疲れがないっていえば嘘になるが。まさか、俺に向けられた最後の刺客がお前たち2人とわな。顔を合わせるのはお前たちの結婚式に以来になるな。元気そうで安心したぜ、黒鉄。婿養子に近い形だから、肩身の狭い思いをしてると思っただがな？」

「あはは、それが毎日、お義父さんや国民たちに襲い掛かっているんですよ」

「そうか。さて、話はここまですべてにしてさっさと始めるか」

「引く気はない・・・みたいね」

「当然だ何せ上役を斬って宣戦布告したんだからな」

「・・・」

青年に言われ、黒髪の青年と赤髪の女性はそれぞれ刀と大剣を構える。風が舞い鳥が羽ばたくのを合図に青年と2人の戦いが始まった。戦いは三日三晩続き、勝利したのは

「がふ!? あくく負けちまったか」

黒髪の青年と赤髪の女性だった

「氷室さん・・・僕は・・・」

「・・・そんな顔をするな。こうなると解って戦いを挑んだのは俺だ。悔いは・・・沢山あるな」

「あるんですか!?!」

「そりやあなあ。まあ、最後、の最後に、満足のいく戦いができた。それで、よしと、するさ。黒鉄、これを」

青年は最後の力を振り絞って、黒髪の青年にペンダントを渡した
「本当は、俺が、自分で、渡せば、よかつたん、だが、無理、見たい、だから、な。お前が、かわりに、渡して、くれ。あいつらは、〇〇〇〇に、いる。それと、あいつらに、伝えて、くれ。お前らと、出会えて、よかつ、たつてな」

「伝えます、必ず」

黒髪の青年は青年が持つペンダントを持つ手を両手で握り、誓った
「ありがと・・・な」

答えを聞くと青年は雲一つない空を見上げながら満足そうな顔でことされた。これが青年の2回目の人生の終わり

『己、人間ごときが神である私に逆らうか!?!』

「神は神でも邪神だろうに。世に災いを招く神なんていなくなっちゃまったほうがいい」

『凶に乗るなよ人間が』

こうして青年と神の戦いが始まった。神であることから様々な大魔法を繰り出してくるが、幾度となく死戦を潜り抜けてきた青年にとっては軽く、決着はすぐについた

「勝負は見えな。もう1人のほうも今頃あいつが倒してるころだろう。あいつの逆鱗に触れたんだ、楽には死ねないだろうがな」

『ま、待てー！わ、私が悪かった。今までのようなことは決してせず、心を入れ替え、この世界の者たちを見守っていく！だから、命だけは』
「・・・あのお人好しで、疑うことを知らないバカ勇者ならともか

く、長い間人を、この世界に生きる者たちをゲーム感覚で殺してきたお前の言葉を信じるほど、俺は優しくもないし、お人よしでもない。永久に眠れ」

青年は神の命乞いをバツサリと斬り捨て、両断した。これが青年の3回目の生

「○○○○！○○○○！○○○○！○○○○！○○○○！○○○○！○○○○を連れて逃げる！そして、何があっても生きろ！」

「○○○○!？」

少女は5人の従者に抱えられ青年の名を叫ぶが、青年は振り返ることとはせず、迫りくる大群を見据える

「なんかデジャヴを感じるが・・・まあいい。お前らの身体に叩き込んでやるよ、手負いの獣がどれだけ恐ろしいかをな」

獰猛な笑みを浮かべた青年は愛刀を構え、迫りくる大群に突撃した。そして、

「変な音が外から聞こえてきたから気になって出てみたら、なんで男の子がうちの庭で血だらけで倒れてるんや!？」

これは「剣聖」「神殺しの剣士」と呼ばれた転生者「氷室悠一」の4回目の転生譚

目覚め

「……ん」

「あ！目が覚めたみたいやね」

悠一が意識を取り戻すと、目の前に茶髪のショートヘアの少女がいた

「いや〜びつくりしたで家に帰ってきたら庭に全身傷だらけの上に血まみれの君がおったんやもん」

「……俺は生きてる…のか？」

「何当たり前のこと言ってるんや？あ！もしかして起きたてで意識が朦朧としとるんやな」

少女が一人納得していると、悠一のおなが盛大に鳴った

「お腹もすいてるんやね。ちよつと待っててな、寝起きに丁度ええもん作ってくるわ」

そういうと少女は座っていた車いすを押ししてキッチンへと向かった

「~~~~~」

意識がもうろうとしていた悠一は起き上がろうとした瞬間、尋常ではない痛みに顔をゆがませ、その痛みで意識が覚醒した

「(痛みを感じ、心臓の鼓動を感じるってことは生きてるって証拠だな。それに、やけに目線が低いような)…ん？」

心臓に手を当て鼓動を感じ取った悠一は、ふと窓に映った自分を見て固まる。何せそこに映っていたのは小さくなった自分が映っていたからだ

「(ど、どうなってるんだ!?!なんで小さくなってるとんだ!?!)」

あまりの展開に悠一が混乱していると

「お待ちどうさま〜、消化のこととも考えておかゆにしたで〜〜つてどうしたんや？じつと窓なんか見て？」

「どうや?」

「うまかったよ。こんなにうまい飯を食べたのは久しぶりだ」

「よかったら。人に自分の作った料理を食べてもらうんは初めてやったからなく」

「そうなのか。あ、お代わり貰ってもいいか?」

「ええで」

悠一は少女に空になったお椀渡し、少女はおかゆのお代わりをよそった

「ふくふくうまかった」

「お粗末様でした」

悠一は少女が入れたお茶を飲む。少女も笑顔でお茶を飲み、一息つく

「腹も膨れてことだし、互いに自己紹介と行こうか。俺は悠一、氷室悠一だ」

「私は八神はやてや」

「じゃあ、改めて。俺を助けてくれてありがとう八神」

「はやてでええで。そのかわりユウ君って呼んでもええか?」

「構わない」

自己紹介を終える少女 “八神はやて” は悠一に尋ねる

「それじゃあ早速質問や、なんでユウ君はうちの家の庭で倒れてたんや? しかも傷だらけで」

「直球だな。まず最初の質問、なんで庭で倒れていたかについてだ
がはやてを納得させられる答えは出せそうにないな。むしろ俺が聞きたいぐらいだからな。んで2つ目に質問だが、少しやんちゃをしすぎたっつしか言いようがない」

「少してユウ君の傷の手当てをした先生が言ってたで。 “これだけの重傷で生きてるなんて、あきれた生命力だ” って」

「それは俺も同感だ。ゴキブリ並みの生命力だと思うよ」

「自分でそれ言うんか?」

「まあ、事実だからな。俺からも2、3個質問があるんだがいいか？」

「ええよ」

「『固有霊装』、『伐刀者(ブレイザー)』、『七星剣武祭り』、『トータス』、『ベルカ』、このワードを聞いたことはあるか？」

「ううううんないなうう」

はやての返答を聞き、悠一は自分がまた知らずのうちに転生したことを理解し、ため息をついた

把握

その後、はやてと色々なことを話し合った結果、怪我が治るまでの間、はやての家でお世話になることが決まった悠一はリビングにあるソファに寝っ転がっていた

「(致命傷の傷が治っていて、子供に戻ってる。こんなことできるのは俺が知る限り、一人しかいねえ)」

自分に起きた現象を冷静に分析した悠一は、誰がやったのかを理解した

「(何を考えているんだあの爺さん)」

それすなわち自分を転生させた神

「(転生させてくれたのはいいが、する前に一言言っただけじゃあなかったぜ)」

『(すまんの〜何分、急を要しておったからの)』
「っ!?!?〜!?!?」

悠一は聞き覚えのある声が聞こえ、勢いよく起き上がったが、勢いよく起き上がったせいか傷に響き、痛みで悶絶する

『(まったく、何をやっておるんじやお主は?とりあえずこちらに意識を飛ばすぞ)』

痛みで悶絶していた悠一は数秒と立たずに意識を失い、気が付くと、何もない空間に立っていた

「さて、改めて久しぶりじやの氷室悠一。よく儂がやったと解ったの」

「そりやあなあ。また死んだはずなのに生きてて、子供の姿に戻ってる。これだけの情報があれば理解できる」

「ふお、ふお、ふお!!さすがじやの〜」

悠一の話聞いた老人は長く伸びた髭をなでながら高らかに笑う

「さて、お主をもう一度転生、お主にとって4度目になるわけじやが、理由はさっき言った通り急を要したからじや」

「その急ってのは何なんだ?」

「それがのくくこつちの不手際でお主を飛ばす時代と場所を間違えたんじや。今お主がいるところが本来の転生・いや、そうでもないかの？場所と時代は違えど同じ世界じゃからのくく」

「言ってる意味が解らないんだが？」

「まあ、そのうち解るじやろう。間違えたお詫びとして軍事金と戸籍を用意しておく、あと偽りの情報もな。そうじやの、親が残した莫大な遺産を狙って親の親友を名乗る者たちに迫られたが年齢に似合わぬ強さで撃退したものの、そ奴らが雇った刺客に襲われ、追い払ったものの致命傷を負い、一時だけあの庭に身を潜めようと考えたが、そこで意識を失ったという設定はどうじや？」

「あくくそこら辺のことは爺さんに任せるよ」

「ではそのようにしておく。それとこれを渡しておく」

そういうと、老人は表紙の描かれていない一冊の本を取り出し、悠一に渡す

「これは、〇〇〇が俺にくれた」

「大切に取っておくのじやぞ？それでは楽しんでくるがよい」

「ユ・・・、ウ・・・、ユウ君！」

「うんん・・・はやて？」

「おはようさん。よく眠れたみたいやな？」

「・・・体中痛いけどな」

「ごめんなあくく何せ急に決まったことやから。でも、今日はベッドで寝れるでくく。それとも一緒に寝る？」

「ませたこと言ってるんじやねえよ」

「あう!？」

にやにやと笑うはやてにイラついたのか悠一は軽めのデコピンをはやての額に行くと、腹部の上に本があることに気づいた

「あいつがなんでこの本を俺に渡したかは知らないがとりあえず大事に取っておくか」

名前も何も書かれていない本を手にとった悠一は、はやてが痛みで悶絶している間に本を『宝物庫』へと収納した

散策にトラブルは付き物↑それはお主だけじゃ
y神 b

「仕事が早い爺さんだ」

はやての家に厄介になってはや1週間、日常に支障が出ない程度までに傷が癒えた悠一は役所にいき、自分の戸籍があるのかを確認しに行く、本当に存在していたことに悠一は呆れると同時に神に感謝した

「世話になるかもしれない町だ、一通り見て回るか。ついでにうまい物巡りでもするか」

思い立ったらなんとやら、悠一は近くの本屋に入り、グルメブックを購入すると、乗っている店から直感で行く店を数店選ぶと、購入したスマホのアプリに場所を記入して散歩兼グルメ巡りを始めた

「さずかは俺の第・六・感だな。外れがないぜ」

感で決めた店に行き、おすすめメニューを堪能した悠一はものすごく機嫌だった

「甘いものが喰いたくなつたな。え〜とおすすめのスイーツ店は……よしこの『翠屋』ってところに行ってみるか。……今いる場所から結構離れてるな。まあ、腹ごなしだと思えばいいか」
次に行く店を決めた悠一は、アプリの地図を頼りに歩いていくと、豪邸が目映った

「……どんな所にもいるんだな金持ちって」

家の大きさに悠一が感心している、ドアが開き、メイド服の少女と、現在の自分と同じか少し下の女の子が出てきた

「(絵に描かれたようなお淑やかそうな子だな) まあ、俺には関係ないな」

止めていた足を再び動かそうとしたら黒塗りの車が悠一の横を猛スピードで横切った

「あつぶねえな！ 気をつけろこのタコ！」

クラックションも鳴らさずに走ってきた車に悠一が文句を言っていると、車は豪邸の少し前で止まった。それを見た悠一はなにか嫌な予感を感じた。そして、門が開き女の子とメイド服の少女が出てくると、車に乗っていた者たちが一斉に降りて、2人を囲う

「な、なんですか貴方たち……あう!？」

「フアリン!? しっかりし……むぐ!？」

メイド服を着た少女が女の子を守ろうと楯になったが男の一人に頭を強打され気を失い、女の子は大声を上げようとしたが布で口を塞がれ、数秒立たないうちに意識を失った

「(嫌な予感的中だな。なんで俺は散策や散歩をしているところ面倒ごとに巻き込まれるんだ?)」

前の世界でも休日にもショッピングモールに遊びに行けばテロリスト集団のテロに巻き込まれ、何も起きないで安堵してファミレスに入れば、自分の学校の生徒と他校の生徒の虎ぶりに巻き込まれた等々、そういった運はあまりよくなかった。無視できる状況でもなかったため悠一は大声を上げようとするが気が付いたら誘拐犯の一人に縄で手足を縛られ車に放り込まれていた

「(うそ……ん)」

烈風

「う、うううううう……(こ)は？」

「あくくく気が付いたみたいだな」

女の子が目覚ますと隣には見知らぬ少年が座っていた

「あ、あなたは？」

「ん？偶々、君の誘拐される現場にいて、それを目撃したって理由で連れてこられた少年だ」

「!?ご、ごめんなさい。私のせいで関係のないあなたまで……」

「謝らなくていい。誘拐されるところを見て、助けを呼ばずただぼーっとしてた俺の自己責任だ」

誤ってくる女の子に少年は気にするなという

「これも何かの縁だ。とりあえず自己紹介でもしようや。俺は氷室悠一だ」

「わ、私は月村すずかです」

互いに自己紹介をすると悠一とすずか

「月村は誘拐されそうな心当たりあるか？」

「えっと、いろいろとありすぎて答えられません」

「(金持ちだっという以外で何かあるのか)」

普通の者たちからその返答を聞き流すが、悠一は聞き流さずにそれについて問おうとしたが、簡単に聞けるような話ではないと直感で感じ取り胸の内にとまった

「(さくくくこれからどうしようかねく？この子を連れて逃げるくらい訳ないけど、追ってこられるのもやだからなく)」

「あ、あの」

「んっ。」

「こ、怖くないんですか？」

「怖いって何が？」

「だって、私達誘拐されたんですよ？もしかしたらこ、殺されるかも

しれないですから」

「(あゝ確かに普通の子供なら怖がる場面だな)」

「さすがの問いに納得する悠一。だが、悠一にとって誘拐程度では恐怖しない。何故なら」

「(怒ったあいつらのほうが誘拐犯よりも万倍怖いからな)」

悠一はこれよりも怖いものを知っているからだ

「助けがくるって信じてるからな。まあ、それまでの間は生き残ることだけを考えるのがベストだ」

「・・・生き残ること」

「そう。まあ、安心しろ、助けが来るまでは俺が君を守る」

もつともなことを言った悠一は少しでもすずかを安心させようとガラにもないセリフをいうと、ドアが開き、全身黒で装飾された数人の男と、誰が見ても裕福といった感じの男が入ってきた

「久しぶりやな、月村家当主の妹よ」

「あ、あなたは」

「(知り合いか?)」

すずかの反応で目の前にいる男と知り合いなのだと思えてくる。男は悠一のほうを見る

「おい、ワシは娘だけを連れて来いとゆうたはずやで?」

「す、すいません。ターゲットを連れて行こうとした際、このガキに誘拐する場面を見られてしまい、やむを得なく連れてきました」

「・・・まあええ。連れていけ」

「はい」

男の指示で黒服の男がすずかを立ち上げさせる

「さて、連れていくなら俺を連れていけ」

「悪いがワシが用があるのはこの娘だけや。後は任せたで」

「はい」

男はすずかを連れて部屋から出て行った。そして、残った男は懐から拳銃を取り出し、銃口を悠一に向ける

「坊主には悪いがここで消えてもらう。・・・恨むなら運のない自分を恨むんだな」

男は引き金に指を添え、何の戸惑いもなく撃った

「指定された場所はここね」

とある廃墟に2人の女性と1人の青年がやってきた。女性の1人の名前は月村忍、誘拐されたすずかの姉、メイド服を着た女性はノエル・K・エーアリヒカイト、誘拐の際すずかのそばにいたメイド、フアリン・K・エーアリヒカイトの姉、青年の名前は高町恭也、忍の恋人である

「ですが、いったい誰がすずかお嬢様を……」

「……思い当たる節がいろいろとありすぎて困るけど、私の予想が正しければあの男だわ……きつと」

「忍、あの男というと」

「ええ。私やすずかの叔父にあたる男……月村安次郎よ」

恭也の問いにすずかは苦虫を噛みつぶしたような表情になる

「相手がワシだと解った上でくるとはのくくよほどこれが大事らしいな」

3人が声のするほうに振り向くとすずかを誘拐した者たちのボスである男、月村安次郎がおり、隣には手足を縄で縛られたすずかが横たわっていた

「数年ぶりやの月村家現当主殿とその伴侶。そして自動人形」

「やつぱり貴方だったのね。捕まっていけないことは知っていたけど、まさか堂々とこの町に戻ってくるなんて」

「ワシにもそれなりのコネはあるからの。じゃが、金銭も切れ掛かってきたさかい、賭けにでることにしたんや。指定したものは持つてきてるんやろうな？」

「……ええ」

忍はポケットからUSBスティックを取り出し、安次郎に見せる
「私が解析した自動人形のデータと製造法が入っているスティックよ」

「ちゃんと持ってきてくれたようで安心したわ。ほれ、とつとそ
れをワシに渡せ」

「すずかの解放が先よ！」

「いいやそのデータが先や。いうことを聞かんと関係ない者がさきに死ぬで？」

「どういうこと？」

忍が問うと

「何、この娘を誘拐する際、運悪く誘拐現場にいたガキも一緒に連れてきたんやそうや。そのガキは別のところに監禁しとる。言ってる意味が分かるな？」

「っ!？」

その子供を生かすも殺すも自分次第だと言っているのが理解した忍は歯を食いしばる

「理解したらデータを渡してもらおうか？」

「・・・解ったわ」

観念した忍はデータの入ったメモリを安次郎の部下の男に渡す。
メモリを受け取った男は安次郎の元に戻り、メモリを渡す

「ふふふ、これや、これ。これさえあればワシは・・・」

「データは渡したわ。すずかと一緒に誘拐した子を解放して」

「約束やからな解放したる。あの世へとな」

安次郎が笑みを浮かべながら言うと、物陰から武装した集団が現れ、忍たちに銃を向ける

「どういうことかしら？ 話が違うじゃない」

「違うないで解放したるんや。この世にある色々なしがらみからな」

忍を守るべく恭也が動こうとするが足元に銃弾を撃ち込まれ、動くことができない

「ああ、それと一緒に連れてきたガキやけど。一足先にあの世に

行ってるで」

「っ!?!」

安次郎が言ったガキが誰のことか理解したはずかは眼を見開く

「下種が」

「なんとでもいいや。勝てば官軍なんやからな。やれ」

安次郎の指示で男たちが一斉に引き金を引こうとした。その瞬間

「うわあ~~~~~!?!」

「な、なんだこれは!?!」

小規模な竜巻が発生し武装した集団はその竜巻に飲み込まれ、宙に投げ飛ばされ、次々と地面に落ちる

「な、なんやこれは!?!」

突然の出来事に安次郎は驚き、忍たちも同様に驚いていた。そして、一陣の風が安次郎たちの間を吹き抜けると、側にいた男は吹き飛ばし、安次郎が持っていたメモリがなくなり、縛られ動けなかつたはずかが消えた

「あそこだ」

この中で動体視力の良い恭也が指さす場所を全員が見るとそこには、私服姿から戦闘用の服に変った悠一がすずかを抱えた状態で月の光に照らされていた

目には目を歯には歯を痛みには痛みを

時はさすがが安次郎に連れていかれたところまで遡る

「坊主には悪いがここで消えてもらう。・・・恨むなら運のない自分を恨むんだな」

残った男が自分に銃を向けた。それだけで悠一はすべてを悟った。だが、口約束とはいえずかを守ると言った手前、悠一は殺される気はなかった

「なに!？」

男は驚く、引き金を引き銃弾を撃ったが、縛られた悠一が縄だけを残して忽然と消えたからだ

「ど、どこに行った!？」

事の成り行きを見守っていたほかの2人も突然のことに驚くが、背後から感じたことのない衝撃を受け、2人の男は声を上げることなく吹き飛び、壁にぶつかつた

「いの」

「遅い・・・破甲拳!」

男は振り返り、何らかの方法で縄から抜け出した悠一を撃とうとしたがそれよりも早く悠一が男の懐に入り、腹部に強烈な拳撃を繰り出した

「がっは!」

拳撃を食らった男は数歩後ろに下がると、膝をつき、息を吐きだす「やっぱこの体格じゃ気絶させるのは無理か。まあ、今の一撃は倒すのが目的じゃないからいいとするか。さて、あの子がどこに連れていかれたか、目的は何なのか全てを洗いざらい吐いてもらう。ちなみに拒否権はない」

男が悠一を見ると、とてもその年齢の子供ができる表情ではなかった

「降臨、満を持して・・・ってか？」

月明かりに照らされた悠一は年相応の笑みを浮かべながら声高らかに話す

「な、な、何故お前がここにいるんじゃない!? 殺すよう部下に命じたはずじゃ!?!」

「殺されていないからここに居るそれだけだ」

「あ、あり得ん。運よくあの場から逃げ出せたとしてもお前を監禁していた場所には10人近い部下がいたはずじゃ!?!」

「ああ。そいつらなら今頃夢の中さ」

「・・・して?」

「ん?」

「どうして来たんですか? 助かったら逃げればよか・・・ったのに?」

「口約束とはいえ守るって約束したからな。それを言っておいて逃げるなんてかつこ悪いことできないだろう?」

「何をしておる! 高い金を払って雇ったんじゃないぞ! さっさとこいつらを始末せんか!!」

気を取り直した安次郎が竜巻に捕らわれていない男たちに叫ぶが

「そうは言われなくても。竜巻に飲み込まれないよう踏ん張るだけで精いっぱい・・・」

うわああああああ!!」

「ええい! 役立たずどもが!!」

「どうやら形勢逆転みたいね叔父様?」

「つく!?! (どうすれば・・・そうじゃ!) おい! その小僧!」

「あん?」

ゆっくりと近づいてくる忍を見て後ずさりながら安次郎は逆転の策はないかと考える。そしていい案を思いつき悠一に声をかける

「ワシと取引をしないか? お主が抱えているその娘以外、あの3人

を始末してくれれば、ワシが後で手に入る富の1、いや2割をお主に渡そう」

「……あんな馬鹿か？」

「な、なんだと!？」

子供にバカ呼ばわりされたのか安次郎は大声あげる

「大方、自分が雇った連中倒した俺を雇ってこの場を乗り切ろうと思っただろうが、自分を殺すよう指示した奴と取引する奴がいると思うか？少なくとも俺はしないな」

「当てが外れたみたいね叔父様？」

「(少し、ほんの少し隙ができれば……) そう言えばガキ、お前はさつきその小娘を守るといっておったな？馬鹿な奴よ。自分が守るといった者がどういうものかも知らずに」

「あ？」

「小娘とそこにいる娘は守られる側でなくむしろその逆、狩られる立場の者達だ。なぜならその2人は……」

「やめてー!」

「やめなさい!!」

安次郎がなにを言おうとしてるのか理解したはずかと忍はやめるよう言うが

「吸血鬼だからだ!!」

言いたいことを言う安次郎はスタングレネードを取り出し、地面にたたきつけた。まばゆい光が廃墟を照らす。光が長また時には安次郎はそこにはいなかった

「はあ、はあ、はあ」

スタングレネードと忍とすずかにとっての禁句を使ってあの場から逃げることに成功した安次郎はどうか車を止めている場所にたどり着いた

「雇った男たちに払う金を後払いにしておいて正解だったわい。欲しかったものは手に入らなかったが、命あつての物種じゃ。しばらくどこかに身を隠してやり過ぎし、チャンスを待つと……」

「いや、あんたに次はねえ」

「!?」

この場にいるはずのない声が聞こえると、安次郎が乗ろうとした車が真つ二つに斬られ、爆発した

「まずい状況になると逃げる。小物の考えは解りやすくいいぜ」

片手ですずかを抱え、反対側の手に大太刀を持った悠一が爆発した車をバックに安次郎に歩み寄る

「さてさてさくくして、どう落とし前をつけさせようかね」

後ずさる安次郎に歩み寄りながら悠一は考える

「そうだ、月村が味わった倍の苦痛を味わわせるか」

どうするのか決めつたのか、悠一は手に持つ大太刀の切っ先を安次郎に向ける

「つひ!? た、頼む! い、命だけは!」

悠一が何をしようとするのか分かった安次郎が命乞いをするが

「……こんな言葉を知ってるか? 撃つていいのは撃たれる覚悟のあるやつだけだ」

悠一はハイライトの消えた眼で安次郎に見ながら、躊躇いなく大太刀で安次郎を突き刺した

「……」

人を殺す場面をまじかで見ただすずかは恐怖に体を震わす

「ごめんな。見なくてもいい場面を見せちまって」

「ど、どうして、こ、殺したんですか? 確かに叔父は私にひどいことをしました。でも、殺す必要なんて」

「死んじやないよ」

「え? で、でも、今その刀で叔父を」

「このおっさんから血は流れてるか?」

「……血が流れていな……い?」

悠一に言われ、安次郎の体をよくよく見たすずかは、血が流れ出てい

ないことに気づく

「こいつはちよつと特別でな。精神ダメージのみを与えることができるのや」

「すずか!？」

「すずかお嬢様!？」

すずかの問いに答えながら太刀をしまうと忍とメイド服の女性が血相を変えた表情で2人に駆け寄る

「・・・気を失っている。もしかして君が？」

「ええ。まあ、どうやったかは秘密ですけど」

「とりあえず、警察が来る前に色々とやっておかないといけないわね。ノエル、彼を家まで送って行って頂戴」

「畏まりました」

「それと、申し訳ないんだけど明日もう一度、家に来てもらってもいいかしら?今夜のことで色々と話さないといけないことがあるの」

「解りました。じゃあ明日」

「ええ。すずか、あなたも家に戻りなさい。いろんなことがあつて頭が混乱してるでしょうからね」

「うん」

そして、悠一はノエルにはやての家まで送ってもらい。家に入った途端、鬼の形相をしたはやてからありがたのお説教を受けた

夜の一族

「ようこそおいでくださいました」

翌日、悠一は昨晚のことで話をするために再び月村家を訪れるとノエルとすずかを守ろうとしたメイドが出迎えた

「どうも。えっと」

「初めましてファリン・K・エアリヒカイトといいます。昨日はすずかちゃん……すずかお嬢様を助けてくださってありがとうございます。すす」

「どうぞこちらへ。お嬢様達のところへご案内します」

ノエルとファリンに案内され、悠一は月村家へにお邪魔し

「ようこそ月村家へ。昨日はぐっすり眠れたかしら？」

忍、恭也、すずかが待つリビングへと連れてこられた

「YesかNoで答えるならYesですね。久しぶりに運動したからよく眠れましたよ」

「あれが運動って」

事後処理のために残った忍は安次郎が雇った男たちに起こった惨状を思い出す。木に縛られ動けない者、壁にめり込まれ気を失ったもの、悪夢でも見ているかのようにうなされているもの、様々な者たちがいた

「……とりあえず立ち話もなんだかな、座って頂戴。ノエル、彼に飲み物を」

「はい。何になされますか？」

「ファンタがあるならファンタで」

「畏まりました」

「(……あるんだ)」

お金持ちの家だからファンタはないと思っていた悠一だったが、あることに驚いた

「君の名前はすずかから聞いたけど、直接聞かせてもらえないかし

ら？」

「人に名を尋ねるときはまずは自分から尋ねるのが礼儀じゃないですか？」

「確かにそうね。私の名前は月村忍。貴方が昨日助けてくれたすずかの姉よ。こっちは私の彼氏の・・・」

「高町恭也だ」

「そして私たちの後ろに控えているのが・・・」

「お嬢様、私とファリンはもう自己紹介いたしました」

「そうなの。それじゃあこれで全員ね。では改めて君の名前を教えてくださいもらえるかしら？」

「氷室悠一。特別な力を持った以外はどこにでもいる普通の少年です」

「夜の一族、吸血鬼ですか」

自己紹介を終えると悠一は忍から自分たち夜の一族について教えられた

「(爺さんめずいぶんとファンタジーな世界に転生させたな。いや待てよ？俺がいた世界もそれなりにファンタジー世界に入るな)」

「あの、氷室さん」

「ん？なんだ月村？」

「わ、私たちのこと怖くないんですか？」

「なんで？」

「だって、私やお姉ちゃんは吸血鬼・・・」

「だから？」

「え？」

すずかの問いに悠一はそれがどうかしたのかといわんばかりの口調と表情で返す

「月村は月村だろう？俺としては初めて見た吸血鬼が月村みたいな

かわいい子でラッキーだと思ってるぜ?」

本当は真祖返りと呼ばれた存在に会ったことがある悠一だったが、見た目は少女でも中身は

『それはマナー違反』

「(空耳か? 今〇〇の声が聞こえて気がしたんだが?)」

「っ!?!」

「(はずかっいたらあんなに顔を赤くしちゃって。これは面白いことになりそうね)」

悠一の発言にはずかさは顔を真っ赤にして俯き、それを見た忍は人知れず笑みを浮かべる

「さて、氷室君。私たちのことを知ってしまった以上、あなたには2つの選択肢があるわ。1つは私達こと、吸血鬼だということをお貴方の記憶から消去する。2つ目は秘密を共有して生涯連れ添う関係になる、簡単に言えばはずかしの婚約者になることになるわね」

「・・・はい?」

悠一は自分が考えていた予想の斜め上の選択肢に柄にもなく目を点にする

「忍、はずかちゃんも彼もまだ小学生だぞ? それはいくら何でも早すぎると思うぞ?」

「そうかしら? 私情も含めて将来はずかはかなりの美人になると思うわ。それに私の見立てでは氷室君は恭也レベルだと思うわ」

「はずかちゃんの気持ちを無視して決めるようなことじゃないだろう? まずは友達という関係から始め、お互いのことをよく知ってから決めればいい。功を焦っても何もいいことなどない」

「お嬢様、私も恭也様の意見に賛成です。はずかお嬢様の一生を決める大事なことなのですから」

「むくくくく解ったわよ。こう言うことになったけど貴方はどうはずか?」

恋人である恭也と従者であるノエルに論され、忍は渋々と2人の案を採用し、はずかに尋ねる

「う、うん。私もそれがいいと思う。さすがにお姉ちゃんや恭也さ

んのような関係はそのまま早いと思うし・・・」

「思うってことは、私達みたいな関係になりたいっていう願望はあるのね？」

「あう」

初めて見る妹の乙女な表情に忍は満足げに頷く。そして議論の結果、記憶を消さず友達という関係から始めるということになった。なお、悠一が飛び級で大学を卒業し、社会人1年目だと知った忍たちは大声を上げたとか

ありふれた日常

「ありがとうございます。またのお越しをお待ちしています」

普通の学生なら学校に行き、勉強をしたり遊んだりとしている時間帯。我らが氷室悠一は何をしているかというところ

「悠一君。コーヒー2つとサンドイッチを3番テーブルにお願い」

「ウイース」

高町家が経営している喫茶「翠屋」でバイトをしていた。なぜ悠一がこんなことをしているかというと、ほかならぬ恭也の提案だ。飛び級で大学を卒業し社会人1年目とはいえ悠一はまだ子供、とても働ける年齢ではない。亡くなった親（都合上）が残した金銭があるとはいえ無限ではない。そこで恭也が自分の家族が経営している喫茶店でバイトをしないかと話したのだ。悠一はメリットとデメリットを考えた後、その提案を了承し、1週間前から働いているのだ

「お待たせしました。コーヒーとサンドイッチになります」

「ありがとうございます。その年齢でもう働いているんだなんて大変ねえ」

「いえいえ。それではごゆっくりどうぞ」

悠一はお客様に一礼すると下がった

「ふふ、お客様との会話もそうだけど、接客にもずいぶん慣れたね悠一君」

「まあ、1週間もあればこれぐらいは」

悠一がカウンターに戻ってくるとこの店のマスター、高町士郎が笑みを浮かべながら話しかける

「（これで3児の父親なんだからな。師匠並みに化け物な人だよな）」

悠一は自分にとある剣術を教えてくれた者も高年齢だったというのにいまだ青年で通すことができるその容姿に戦慄する。だが実際、悠一も35歳だったのにもかかわらず青年期で通せるほど、老けてい

なかった

「いらっしやいま・・・なんだはやてか」

「なんだ・・・はないんやないか？私はお客様やで？」

来店を知らせるベルの音を聞き、悠一が接客にでるとそこにいたのははやてだった

「今日は一日中、図書館にいたと思ってたんだが？」

「私も最初はそうしようと思ったんやけどね」

「まあいい。いつもの席でいいんだな？」

「うん」

悠一は車いすを押しはやてを窓側の日当たりのいい席に連れて行く

「さて、ご注文は？」

「お昼がまだやったからユウ君特製のオムライスと紅茶、食後にシュークリームで」

「あいよ」

注文を取った悠一は席から離れカウンターに戻ると

「土郎さん、すいません。少し」

「構わないよ」

土郎に一声かけると悠一は厨房に入ると冷蔵庫から必要な食材を取り出し調理を始めた

「お待ちせしました。ご注文のオムライスにサラダと野菜スープです」

料理が出来上がり、はやての座るテーブルに料理を並べる

「わあ~~~~おいしそうやわ〜」

「食べたければ家で作ってやるのに」

「家の厨房は私の聖地やもん。それじゃあ、いただきます」

食事を始める際の挨拶を行うとはやては悠一の作った料理を食べ始める。すると、悠一は持つてきたもう一つのトレーからオムライス

をテーブルに置き、席について自分も食べ始める

「なんでユウ君も食べてるんや？」

「昼飯まだだったからな。ちゃんと士郎さんに許可は貰ってる」

「でもこういうときってお店の奥で食べなあかんと違うんか？」

「そうなんだが、士郎さんが『今はあまりお客さんがいないからはやてちゃんと一緒に食べてあげなさい』だとさ。まあ、要はあれだ。1人で食べるより2人で食べたほうがもっとおいしく感じられるってやつだ」

「『ごちそうさまでした』」

食後の挨拶を行うと悠一は空になった食器をトレイに乗せて厨房へと持っていき、はやてが注文した紅茶とシユークリームを持っていく

「ほい、食後の紅茶とシユークリームだ」

「ありがとうございますユウ君」

悠一にお礼を言うとはやては持ってきたバックから1冊の本を取り出した

「今日は何の本を借りてきたんだ？」

「タロットカードの種類とそれを使った占いについて書かれた本や」

「占いでも覚えるつもりか？」

「興味本位で借りた本やからね。でももし覚えられたら『美少女占い師はやて』としてデビューするのも悪くないな〜」

「美少女？」

「私のことや。どこからどう見ても美少女やろ？」

「っは」

「は、鼻で笑うことないやないか!!」

自分の体を見た後、鼻で笑った悠一にはやては憤怒するが

「お客様。他のお客様の迷惑になるので大声は出さないでください」

「ムキィ——」

一瞬で仕事モードに戻り自分に注意する悠一ははやては物いえぬ怒りを覚えるがシュークリームを一口食べ、紅茶を飲んで怒りを鎮め、本を読み始めた。本を読み始めたはやての邪魔にならないように悠一は静かに仕事へと戻った。その後、学校が終わり戻ってきた土郎の娘である高町なのはとその友達、アリサ・バニングス、すずかの3人ははやてを見つけるなり席に行き、学校での出来事等を話していた。どこにでもある普通の日常、そんな日常がずっと続けばいいなど4人を見ながら悠一は思った

日常が崩れた日

「変な夢を見た？なのはちゃんですか？」

店の開店準備をしながら悠一は士郎とその妻である高町桃子から今朝の出来事を聞いていた

「ええ。なんでも1人の少年が学校の帰りによくとおる公園で怪物のようなものと戦っている夢を見たといっていたわね」

「夢にしてはずいぶんとリアルですね」

「そしてこれだ」

士郎は新聞に書かれている一面を悠一に見せる

「何々〃〇〇公園で橋、貸出ポート及び、近辺の木々が壊されているのが本日午前〇〇時に発見された〃〃〃偶然にしては出来すぎてますね」

「君もそう思うかい？僕はねなのはが見た夢は何かの予兆なんかじゃないかと思ってるんだ。つというわけで悠一君」

「貴方には今日、なのは達に迎えに行ってもらいます」

「・・・はい？」

いつにもまして真剣な表情で言ってくる2人に悠一は聞き返す

「もしかしたらこれをやった犯人が近くに潜んでいて、なのは達に危害を加えるかもしれないだろう？そのための保険さ」

「いやいや、俺、子供ですよ。太刀打ちできるわけないでしょう？」

「恭也と対等に打ち合っているのを僕が知らなくても？」

「・・・む」

「身体が出来上がっていないからかもしれないが君の剣は〇〇にまで至っているんじゃないかな？」

「・・・うぐ」

「まあ嫌だというのなら仕方がない。少し遠いが美由紀にお願いします。その分、あの子の来月の小遣いは君の給料の3分の一上乗せし

ないとな」

「(横暴だ) 解りました。行きます、いえ、行かせていただきます」

「そうかい? いや、くすまないねえ」

「(無性に殴りたくなつた俺は悪くないよな?)」

いい笑顔で言ってくる土郎をみて悠一は拳を振るわせながら我慢した

「ねえ、あそこにいるのって」

「悠一さん?」

学校が終わり、仲良し3人組のなのは、アリサ、すずかの3人は一緒に学校を出ると正門で壁に背を預けて立っている悠一の姿を見つけた

「悠一お兄ちゃん」

「おお、なのはちやんようやく来たか」

なのはが駆け寄り、声をかけると悠一は笑みを浮かべる

「ようやくって私たちのことを待っていたんですか?」

「店長命令でな。3人のお迎えを頼まれたのさ。新聞・・・はまだ見ないな。〇〇公園でボート、橋、木々が壊されていたことは聞いたか?」

「うん。今朝の朝礼で先生が教えてくれたの」

「それをやった犯人が周辺に潜んでいるかもしれないということ
で3人のお迎えを頼まれたんだ」

「そうだったんですか」

悠一の説明に3人は納得しうなづいた

「合流できたし、行くぞ。このままだとまた説明しなくちやいけな
いからよ」

「説明ってなんのですか？」

「小学生なのになんで学校に行かないでここに居るのかっていう説明。3人が来るまでこの先生に散々説明したんだ」

悠一の話聞き、なのは達は苦笑いする

「悠一さん、ちよつとだけ〇〇公園によって見てもいいですか？」

「おいおい、俺の話聞いてた？」

帰り道、好奇心の強いアリサが悠一に質問する

「勿論聞いてましたよ。でも、気になるじゃない。なのはとすすかもそうよね？」

アリサの言葉に2人は戸惑いがちになりながらもうなづく

「・・・少しだけだぞ」

こうと決めたらどこでも動かないことをこの1週間で知った悠一は渋々、アリサの願いを聞く。そして一同は〇〇公園に行く。警察も来ているのか立ち入り禁止のテープが張られそれ以上先に進めないが壊されたポストや橋の残骸等がチラチラと見えた

「確認もしたことだしそろそろ行くぞってこらー！どこに行くんだ!？」

突然走り出した3人に悠一は怒鳴り声をあげるも、3人はそれを気にせずに走っていく

「あ~~~~もう」

髪を乱暴に搔くと悠一は走っていった3人を追いかける。数分もしないで悠一は3人に追いつくと自分の言いつけを破った3人に拳骨を食らわせようとするも、なのはの手に乗る物を見て顔をしかめる

「(なんだこの動物は？普通じゃねえな)」

怪我をした動物を見た悠一は何か崩れるような音が聞こえた

け、その穴を通った

「あり？」

到着した場所を見て悠一は目を点にした

「おつかしいな〜。すずかちゃんに渡したネックレスに仕込んだ魔力を頼りに来たんだが」

悠一はボロボロになった建物を見る

「帰る途中でなのはちやん達が見つけたフェレットを預けた動物病院だよな？なんでこんなボロボロになってるんだ？ん？」

月よの光で瓦礫の下で何かが光つたのを見た悠一は瓦礫をどかすと、そこにはネックレスがあった

「これは、俺がすずかちゃんに渡したネックレス。これがここにあるってことはすずかちゃんはここにいた。そして何らかの拍子でひもが切れて落としたって所か」

仮説を立てた悠一はため息を吐くと気配感知を行い、すずかを探す「結構近いな。それになのはちやんとアリサちゃんも一緒か。何かから逃げてるのか？行けば解るな」

ここにいてもしょうがないと解った悠一は感知を頼りにすずか達の搜索を再開した

「もう〜〜〜何なのよあれは!!」

「お、落ち着いてアリサちゃん！」

「こ・ん・な状況で落ち着けられるわけないでしょうが!!」

わき目も降らずに一心不乱に走るなのは、すずか、アリサの3人。

そんな3人を追うように雲のような形をした怪物が追いかけてながら3人を攻撃する

「きゃあー!?!」

「シヤレになってないわよ!?!」

「(家を飛び出る前に悠一さんに電話をしておけばよかった)」

怪物の攻撃で塀が壊れ、地面に穴が開く。そんな攻撃が直撃すれば自分たちはどうなるのか考えるまでもなく理解した3人は走るが、所詮は人間、それも子供、限界はすぐに訪れる

「はあ、はあ・・・もうダメ」

3人の中で運動神経(とあるもの以外)が一番低いなのは走る速度が落ち始める

「止まるんじゃないわよなのは!止まったら死ぬわよ!?!」

「頑張つてなのはちゃん!」

「そ、そんな、こと、いわ、れても」

アリサとすずかの2人から激高を受けるが既になのはは限界だった。そんななのはに怪物の攻撃が迫る

「なのは／ちゃん!?!」

「あ」

攻撃が迫る中、なのははすべての事象がスローモーションになるのを感じた。そして、いろいろなことを思い出す。怪物の攻撃がなのはに届くまであと数メートルといったところの一つの影が間に入り、怪物の攻撃を打ち消した

「これは一体何の冗談だ?」

悠一は目の前の現象にため息を吐く。その右腕には膨大な量の電気が帯電していた

「ゆ、悠一お兄ちゃん?」

「よう、なのはちゃん、アリサちゃんにすずかちゃんも。小学生が随伴もいないで夜遅くに散歩いやダメだって先生やご両親に言われなかったか?」

「あ、あなたは一体?」

「通りすがりの一般市民だ・・・って、今のは誰の声だ?」

返答してから聞こえてきた声が聞き覚えのない者のだと解つたあたりを見回す

「あのくく僕です」

「……」

なのはの腕に抱かれているフェレットが前足を掲げながら申し訳ないような声で話す

「ただのフェレットじゃないってことは解つてはいたが、まさか喋るとはな」

「え？そ、それだけですか？」

あまり驚かない悠一にフェレットは困惑気味に尋ねる

「お前以外に喋れる動物を知ってるからな。所でお前はあれが何なのか知ってるのか？」

悠一は唸り声のようなものを上げる怪物を指さしながら聞く

「はい。それで無理を承知で貴方お願いします！少しの間、あれを食い止めてください」

「……何か手があるみたいだな。いいだろう。『絶界』」

悠一はなのは達に手を向け、不可視の空間遮断型の防御結界を展開する

「3人はそのフェレットが言う手とやらが終わるまでここでおとなしくしてろ」

3人に一声かけると悠一は殴られ、数が増えた異形を見る

「なんか増えてるし。まあいい……やりますか」

悠一は身体強化を施すと一瞬で異形との距離を詰め、拳を振るうも、突き出された拳は怪物に風穴を開けるだけだった

「(見た目通り雲みたいなやつだから打撃は意味をなさないな、斬撃もやめたほうがいいな、下手をすると数を増やしかねないな。奴に効果のあるのはこれだな)」

今の攻撃で状況を理解した悠一は右手を異形に向け

「『黒渦』」

悠一が呟くと、異形達のいる場所の力場が変わり、異形達を地に押しつぶす

「準備とやらが出来るまでそこでおとなしくしてろ……ん？どうやら準備完了みたいだな」

後方が一瞬明るくなったのを見て、準備ができたのだと理解し、振り返ると

「なのは……ちゃん？」

「な、な、なにこれ……!!」

両手に見慣れない杖をもって空に浮かぶなのはが目に映った。そして当の本人は何が起こったのか分からないでいた

「なのは！杖をあれに向けてさつき教えた心に浮かんだ呪文を唱えて封印するんだ！」

「……ユ、ユーノ君、い、言わなくちやダメなの？」

「？熟練の魔導士は必要ないけどなのはは初めて魔法を使うから言葉が紡がないといけないんだ」

「う、うううう……リリカル・マジカル！ジュエルシード封印！」
観念したのかなのはは赤面しながら呪文を唱える。唱え終わるとなのはの持っている杖から放たれた閃光が凍っている怪物にあたる。光が収まると怪物のいた場所に青い宝石のようなものが地面に落ちていた

「(拝啓、高町恭也さん。貴方の妹さんはどうやら魔法少女になったみたいですよ?)」

悠一は今頃、必死でなのはのことを探しているであろう恭也に向け、何とも言えない言葉を送りながら赤面し、悶えているなのはの写真を撮って、恭也に高値で売れるかどうか考えていた

一度起きたことは、立て続けに起きる

「こんな物騒なものが後19個、この町とその周辺にあるねえ」

翌日の昼休み、悠一はユーノから大まかな事情を聞いていた

「んで？お前は、紛失という知らせを聞き危険なものを発見した責任を感じて一人で捜索に来たってわけだ？」

「はい」

「初対面の相手にこんなこと言うのは気が引けるがあえて言わせて貰う。お前馬鹿だろう？危険だっていうことは百も承知なんだろうが、あまりにも無謀すぎる。実際、あの怪物に振り返りに合ったようだしな」

「・・・返す言葉もありません」

悠一の言葉にユーノは落ち込むが

「だが、その意思は見事だ」

「・・・え？」

「危険だと解っていないながらもよその星に迷惑をかけたために動いた。いうことは簡単だが、行動で示そうとするのは中々できないからな」

「・・・氷室さん」

「だけど、その行動で死にそうになったってことだけは覚えておけ。この話、なのはちゃん達には？」

「なのはには一応、昨日の夜にしました。残りの2人には今日話す予定です。魔力が回復するまで休ませて貰ったらジュエルシードの捜索を続けると言ったらなのはが『自分も手伝う』って言いだして」

「あの2人も言いそうだな」

ユーノを話を聞き、悠一はユーノが何に悩んでいるのかを理解した。いくら魔法が使えたからといってもの達は達3人は子供、昨日のような危険もあるし、最悪命を落としかねないかもしれない。そんな場所に連れてはいけなないとユーノは思っているのだ

「まあ、そうそうに事件なんておきはしないだろう。ゆつくりと考えろ、自分と相手にとって一番いい答えは何なのかを・・・な」

そういうと悠一は仕事に戻っていった

「そうそう事件は起きない。そう言った矢先にこれか」

昨夜、なのはを見つけてくれた礼だと言って、いつもより早めに仕事を終えた悠一はコンビニで買った肉まんを食べながら歩いているとずずかからのSOSメールを受信し、急いで現場に向かい、そこで見たのは犬獣と戦う、なのは、アリサ、ずずかの3人だった

「氷室さん」

「これどういう状況？」

「えっと、帰りにジュエルシードが発動して子犬をあのだ犬獣に変えたんです。最初はなのはが1人で戦っていたんですが、防戦一方で、どうしようか悩んでいるとジュエルシードと一緒に発掘された2つのデバイスがひとりで起動して・・・」

「そのあとは言わんでいい。大体わかった」

悠一はため息を吐くと、戦いの場へ向け歩き出す

「た、戦うんですか!？」

「女の子、それも素人だけを戦わせるわけにはいかないだろう？」

ユーノの問いに答えると悠一は瞬身の術で犬獣との距離を詰める
と拳骨を犬獣の頭部に振り下ろす

「「悠一お兄ちゃん／さん」」

「3人も離れてろ。あとは俺がやる」

「で、でも、悠一お兄ちゃんは魔法をつかえな・・・」

「色んなことが起こりすぎてよく見てなかったみたいだな？使えるぞ魔法」

「……え？」

悠一の返答に3人は眼を点にする

「つといても、なのはちゃん達が使う魔法とはちよつと違うけどな。装束展開」

悠一が言葉を紡ぐと悠一の来ている服が私服姿から戦闘用の服へと変わった

「来い『天狼』」

名を紡ぐと1本の大太刀が虚空から現れ、鞘から引き抜く

「グルウウウー！」

犬獣は悠一がただ者でないと本能で察したのか唸り声を上げ威嚇すると背中に生えた突起から無数の針を悠一めがけて飛ばす。悠一は慌てずに大太刀を振るうと、風が吹き、その風が壁となって無数の針を吹き飛ばし、逆に犬獣に突き刺さった

「うわあ〜あれはいてえな」

自分の攻撃でのたうち回る犬獣をよそに悠一は大太刀に雷を帯びさせ、八相の構えをとる

「肆の型・雷電斬光！」

そして、犬獣との間合いを瞬時に詰めると、大太刀を一気に振り下ろして犬獣を斬り、地を斬った

「……」

悠一は残身を行うと大太刀を鞘に戻し、虚空へと戻した

「……っは！なのは！封印を！」

「う、うん！」

あまりの出来事になのは、アリサ、すずか、ユーノの4人は眼を見開いて固まっていたが、いち早く気を取り直したユーノの指示でなのはは杖を犬獣に向け、封印の呪文を紡ぎ、ジュエルシードを封印した

「(氷室さん……あなたは一体、何者なんですか?)」

ユーノは悠一の尋常ではない強さに疑問と一種の不安を感じた

ボールは友達・・・必殺の・・・

「今日はアルバイトも休みでのんびりしようと思ったのに・・・」

「そこや〜」

「そこよ！入れなさい！」

「なんで子供サッカーの観戦に付き合わなきゃいけないんだ？」

現在、悠一は士郎がオーナー兼コーチを務める少年サッカーチーム「翠屋JFC」の試合を見ていた

「サッカーチームのオーナー兼コーチもやるなんて士郎さんも物好きだな〜」

悠一は大声でプレーする選手たちに指示をだす士郎を見ながら呟きながら、翠屋JFCの戦術を見る

「(試合相手はそこそこの知れたクラブチーム、無理に攻めず、カウンターを狙い、隙があれば攻めるって感じか。だけど、同じ戦術を繰り返してたら相手にも気づかれる。実際、対戦相手の監督さんは意図を理解したのか選手を焦らすようにパスを回してる)」

悠一はフィールドを見回しながら冷静に状況の分析を行う。相手側のパス回しに焦れたのかボールを奪おうとしたところをつかれピッチに陥るがキーパーのファインセーブで守り切り、前半戦は終了した

「なんか危なさそうね」

「うん。お父さんどうするんだろう？」

「悠一君」

ふと士郎が悠一の名前を呼ぶ、手招きで来るようジェスチャーをとる

「何ですか？」

「悪いけど後半戦、選手としてフィールドに立ってくれないかな？」

「いやいやいやいや！無理言わないでくださいよ。一緒に練習したことない俺が入っても連携が取れなくなるだけですよ？」

「君ならほかの選手たちのプレーに合わせることができる」

「その根拠は？」

「僕の勘だよ」

「俺にメリツトがないんですけど？」

あくまで出たくないとアピールする悠一だったが

「それじゃあ今月と来月のアルバイト料をあげるでどうかな？」

「よーし、ひと暴れすつか」

給料UPという単語の前には無力だった

「あ~~~~」

選手用のユニフォームに着替えた悠一はフィールド中央で試合開始のホイッスルがなるのを待っていた

「じゃあ、言ったとおりに頼む」

「はい」

隣に立つ選手に一声かけると試合開始のホイッスルが鳴る。選手は試合開始前、悠一に言われた通り、ボールを軽く蹴って上にあげると、悠一は思いつきりそのボールを高く蹴り上げる。試合を見ている誰もが何をやってるんだと思った。だが、蹴り上げられたボールは弧を描くように相手ゴールまで進み、ゴールネットに突き刺さった

「まずは・・・1点」

遅れてなったホイッスルの聞きながら悠一は指鉄砲で相手のゴールを撃ち抜くよう仕草をした。1点を先制されたことから相手は果敢に攻めてきたが、指令塔となった悠一の的確な指示で守備を行いカウンターを仕掛け、4―0で勝利した

「それでは勝利を祝ってカンパーイ」

試合に勝ったことを祝って士郎がささやかな祝勝会を翠屋で開いた。さらには

「お願いします。ぜひ僕たちのチームに入ってください！」

『お願いします!!』

「そんなこと言われてもな」

悠一はサッカーチームの全員に頭を下げられチームに入ってくれようお願いされていた

「ユウ君、すごい人気やな〜」

「まあ、あれだけのプレーを見せられたらそうなるのも当然よね」

少し離れたところで、なのは達が言い寄られている悠一を見て苦笑いをする

「それにしても・・・ユーノ君やったけ？これ本当にフェレットなんか？図書館で見たフェレットと違うよな気がするやけど」

「キュ、キュウ？」

「あ、あははうちのユーノ君は普通のフェレットと少し違うんだ」

はやての問いになのははそれしか言えなかった。その時

「あれ？」

「ん？」

「3人ともどうしたんや？」

「うん、何でもないよはやてちゃん（気のせいだったのかな？）」

何度か感じたことのある力を感じ取った3人だったが、気のせいだと思い、はやてとの会話を続けた。ただ一人除いて

「（今のは間違いなくジュエルシードの気配だな。キーパーが持つてるようだが、どうしたもんかね〜？）」

穿つ閃光

「あの時、あの時ちゃんと気が付いてれば」

「後悔するなら後にしなさいなのは！」

「そうだよなのはちゃん。今はこれをどうにかすることを考えなくちゃ」

「・・・うん」

3人の少女は押し迫る数多の木の根をどう対処すればいいのか考え始めた

時は少し遡る

『それでは今度の試合もよろしくお願いします・・・先生！』

「誰が先生だ」

祝勝会も終わり、翠屋JFCのメンバーは悠一に頭を下げた先生と呼びたえた

「ははは、この短時間で随分と慕われたね」

「誰のせいでもうなった・・・自己責任か」

2か月のバイト料UPという言葉に釣られ、試合に出て、結果を残したのは自分だったと思いついた悠一は項垂れる

「でも僕はいいことだと思ってるよ」

「え？」

「飛び級で大学を卒業して社会人になってるけど、君はまだ子供なんだ。ワーカーホリカーになるのはまだ早いよ」

「はあ（見た目は子供でも、精神年齢は大人なんですよね俺）」

さすがにもう大人ですとは言えない悠一はそういうことしかでき

なかった

「ユウ君、帰りにスーパーによって買い出しせなあかんからそろそろ私たちもお暇しよか」

「そうだな。それじゃあ、土郎さん。また明日」

「うん．．つと言いたいことだけど、今日は頑張ってくれたからね、明日は休みにしておいたよ」

「いいんですか?」

「うん」

「ありがとうございます」

「それじゃあ、なのはちゃん、アリサちゃん、すずかちゃん、またな
〜」

「うん。またねはやてちゃん」

「これで全部やな」

「買った材料から見ても、今日の晩飯はすき焼きか?」

「せや、翠屋で祝勝会を上げたけど、家でも祝勝会をやろうと思って
な」

「．．．ありがとなはやて」

笑顔で言ってくるはやてに対し、悠一も笑いながら礼を言う

「っ! (この感じは)」

「ユウ君?」

「悪いはやて、ちょっとトイレに行ってくる。すぐに戻るからこ
こで待っていてくれ」

「はいな〜」

はやての返事を聞くと悠一はトイレに向かい、個室に入ると

「分け身の術」

自身の分身を1体生み出した

「分身、俺の代わりにはやてを家まで連れて行ってくれ。けっして街へのルートは通るなよ」

「解った」

分身に指示を出すと悠一は戦闘服へと服装を変え、個室のドアを開けると、人々の感覚の隙間を通り抜けながらスーパードアから出て、街へと急いだ。そして見たのは

「なんだあゝゝこれは？」

巨大な木の根だった

「あゝゝもうキリがないわね！」

悠一と同時にジュエルシードの発動に気づいたなのは、アリサ、すずかの3人は悠一よりも早く現場に到着し、目の前の惨状に言葉を亡くしたが、何とか立ちなおし木の根を根絶を行っていたが、再生能力が高く、斬ったそばからすぐに新たな根が生えてきてしまう

「すずか、まだ見つけられないの？」

「もう少しだけこらえてアリサちゃん」

3人の中で索敵能力にたけたすずかが遠くの物を探すサーチャーと呼ばれる物を飛ばして発動しているジュエルシード探していた

「そうは言われても。私ひとりじゃ長くは持ちこたえられないわよ」

圧倒的物量にいつも強気なアリサも弱気になってしまうのも無理

はない。そんな時

「獅吼風塵掌」

聞き覚えのある声と共にどこからともなく現われた獅子が大量の木の根を飲み込み、根を一瞬で塵へと変えた

「こういうのを相手にするときは一つずつ相手にするんじゃない、一気に吹き飛ばす戦法が効果的だぞアリサちゃん」

「悠一お兄ちゃん!」

「助かったけど、いくら何でもやりすぎよ!」

「その心配は無用だろう。ほら見てみな」

悠一の登場になのはは笑みを浮かべ、アリサはやりすぎだと注意するも、悠一の指さしたほうを見ると

「嘘、今の傷一つできないなんて」

少年と少女がジュエルシードを握りしめようとした状態で浮いていた

「うつすらとだが、青い膜のようなものが見える。おそらくその膜がああ2人を守ってるんだろう」

「じゃああれをうち破らない限り」

「封印は難しいだろうな。それに」

亡くなった根が再生し2人を再び包み込んだ

「さてさてさくく、どうしたもんかねくく」

『I have a good idea (私にいい案があります)』

悠一達が悩んでいるとなのはのデバイス“レイジングハート”が全員に聞こえるように話し出した

「レイジングハート?」

『If it is difficult to close a distance, you can seal it from a distance (近づて封印するのが難しいのなら、遠くから封印すればいいんです)』

「あんたねえ、簡単そうに言うけどそんなことできるわけないでしょう?」

『No problem (問題ありません)』

アリサの問いに返答するとレイジングハートのヘッド部分が音夜叉のような形に変わり、トリガーユニットが構築され、ブームが伸びた

『In this form, you can seal from far away. It is only master competence afterwards (この形態ならば、遠くからでも封印できます。あとはマスターの力量のみです)』

「・・・やれるかなのはちゃん？」

「・・・やります。やって見せます！」

「スノーホワイト。位置データをレイジングハートに転送して」

『I felt (畏まりました)』

すずかは判明した位置データをなのはに送った

「さて、それじゃあ少しでも街への被害を抑えますか。アリサちゃん、木の根に向かって今出せる特大の炎を撃ってください」

「で、でも、あまり効果はありませんよ」

「大丈夫だ」

「わ、解りました」

アリサは悠一の指示通り、今出せる高出力の炎を木の根に向け放つ。炎は木の根に着火し、根を燃やすがすべての根を燃やすほどの火力はなかった

「烈風」

悠一は腕を振るいその炎に向け風を飛ばすと、風力で炎の勢いが上がり、瞬く間に根を燃やしていく

『Charge and lock on to target complete (チャージ及び、対象へのロックオン完了)』

「ぶちかましちやいなさいなのは！」

「お願いなのはちゃん」

「うん。行くよレイジングハート！」

『all right』

「デイバイン・・・バスター!!」

なのはが声を上げながらトリガーユニットの引き金を引くと、杖の先端のチャージされた魔力が砲撃となって放たれ、樹木を穿ちつつ、ジュエルシードを封印した

「やったな、なのはちゃん」

ジュエルシードが封印され、樹木が無くなったのを見届けた悠一は、笑みを浮かべると、3人の決意の声が聞こえてきた。それを聞いた悠一は笑みを浮かべると、ボロボロになった街を見回す

「(回収作業、急いだほうがいいかもしれないな)」

改めてジュエルシードの脅威を思い知った悠一は一刻も早くすべてを回収しないことを思い知った

異空間での特訓

「本当にユウ君はお茶会に出ないんか？」

「それを聞くの何回目だはやて？やることがあるから出られないって言ってるだろう？」

「でも、今日は翠屋でのバイトの日やないやろ？」

現在は悠一ははやての車いすを押してすずかの家へと向かっていく

「むう〜〜」

「むくれた顔しても無理なものは無理だからな？」

「ここらでいいか」

はやてをすずかの家まで送った悠一はその足で河原までやっていると、橋の下まで移動し壁に札を張って小規模の結界を展開する。結界の展開を終えると別の札を取り出し壁に貼り付け

「開錠」

合言葉を紡ぐと、光の扉が現れ、悠一はその扉に入っていた

「ここに来るのも久しぶりだな」

光の扉を潜り抜けた悠一がたどり着いたの悠一が神に頼んで用意してもらった悠一専用の訓練場。そこには道場があり、外には滝があった

「んじゃあ、さっそく始めるか」

持参した道着に着替えると悠一は魔力制御の訓練や反射神経、動体

視力を強化させる訓練など普段家ではできない訓練を一通り行う

「さて、締めと行くか」

悠一が魔力を込めた右手で道場の床を叩くと、床を伝って魔力が道場にある木人形達に伝わり、動き出す

「感覚を取り戻すにはこれが一番だ」

悠一は軽く体をほぐすと四方から襲い掛かってくる木人形の攻撃をかわし、拳、蹴りを放ち、弾き飛ばす

「はあああああ」

悠一は立ち止まり魔力を拳に集中させる。好機と判断したのか数体の木人形が襲い来るが

「八の型・破甲拳」

圧縮された魔力を纏わせた拳を受け、まとめて殴り飛ばされた。それからしばらくの間無手での戦闘を行っている、一部の木人形たちが武器を装備して襲ってきた

「（無手での特訓はここまでか）来い『天狼』」

バク転で木人形達の攻撃をかわすと悠一は自身の霊装を呼び出し

「五の型・残月」

後ろから襲いかかってきた木人形の攻撃を半身でかわし、抜刀居合で斬り裂く

「辻風」

振り返りながら刀を振るうと無数の風の刃が生まれ、背後から襲ってきた木人形達を斬り刻んだ。すると、巨大な木人形が現れ、その巨大な拳を悠一に向け振り下ろす

「二の型・螺旋撃」

悠一は回転の動きを利用した一撃で迎撃し、拳の軌道を変えることに成功した

「やっぱり子供の身体じゃ、軌道をずらすので精一杯か。アレを使えば元の身体と同じような動きは出来るだろうが肉体への反動を考えるとやめたほうがいいだろうな」

悠一は後ろに下がると一呼吸置き、刀を蜻蛉の構えで構え、刀身に雷を迸らせる

「肆の型・雷電斬光」

悠一が仕掛けるよりも早く、木人形は拳を繰り出す。当たるまであと数秒だったが、その拳が自身に届くよりも早く、繰り出された悠一の剣戟が木人形を一刀両断した

「この身体じゃ限度は忽までだな。まあ忽でも十分、相手にとって脅威なんだけど」

霊装の展開を解き、指を鳴らすと崩れた人形達の足元に魔方陣描かれあつという間に元に形に戻り、壁へと戻っていった

「やっぱり便利だよなあの世界で手に入れた魔法は。さて温泉にでも浸かつて掻いた汗を流すか。道場もあつて寝るところもあつて、温泉まである。この空間を作ってくれた爺さん（神）には感謝だな」

「ふむ、丁度いい時間だな。これなら少しはお茶を一緒に飲めるかな？」

訓練を終え戻ってくると空は夕焼けになっていた。壁に張った札をはがし、はやてを迎えに行こうとした悠一は何か川で光っているのに気が付いた。周囲に誰もいないことを確認した悠一は足に魔力を集中させて、水の上を歩いていく

「おいおい、これって」

川から拾い上げたものを見て悠一は顔を引きつらせた。何せ悠一が見つけ、拾ったのはジュエルシードだったからだ

「見た感じまだ発動はしてないみたいだが・・・どうしよう？」

偶然拾ったジュエルシードに悩んでいると周囲から気配が無くなったことに気が付き、周りを見回すと、膜のようなものに周囲一帯が覆われているのに気が付く

「これは・・・結界?っ!？」

「その石を・・・渡してください」

何かに気づいた悠一が動くよりも早く、背後から黄色い刃が悠一の

首筋に突きつけられた

迅雷

「(あゝゝゝ完全に鈍ってるな俺)」

悠一は背後にいる誰かに後ろをとられたこと、ぎりぎりまで気配に気づけなかったことに自己険悪する

「もう一度いいいます。その石を渡してください」

「渡してって言われてもな〜。俺はこういう綺麗な石を集めてるんだ。そして、この石は滅多に見つけることのできないぐらいの綺麗な石だ。渡してくださいって言われて、はいどうぞ、なんて言えるわけないだろう？どうしても欲しいっていうなら、力づくで奪ってみな？」

「っ!？」

悠一の言葉に後ろにいた者は悲痛な表情をしながら手に持っている獲物を振るった。だがその一撃は空を切った

「声色で何となく解っていたが。やっぱり女の子だったか」

悠一は背後にいた少女が獲物を振るおうとした瞬間、強化した脚力で地を蹴り、川まで移動したのだ

「貴方もさっきの子たちと同じ魔導士？」

「(さっきの子達?) 正確には伐刀者(ブレイザー)だけだな」

少女は悠一が先ほど戦った子達とは比べ物にならないぐらい強いと感じ、表情を引き締めた

「(見たところこの人はデバイスを持っていない。射撃魔法で牽制しつつ一気に近づいて魔力ダメージで意識を刈り取る) フォトンランサー ファイア」

「(問答無用かよ。って、俺が自分で奪ってみなって言っただんじやねえか)」

悠一は必要最低限の動きで放たれた槍のような魔力弾を躲す。少女は魔力弾の量を増やし、悠一の眼前が塞がったのを見計らって、高移動魔法を発動して悠一の背後に回り込み、大鎌のような形をしたデバイスを振るうが

「ほいっ」と

悠一は魔力を手に集中させ、刃を白羽取りした。そして指に力を入れて掴んでいた刃をへし折った

「っ!？」

刃が折られたことに少女が驚き、動きを止めてしまった

「戦闘中に動きを止めるといい的だぞ？」

「あう!？」

悠一は動きを止めた少女の額にデコピンをする。あまりの痛さに少女は宙に浮かびながら痛みに悶える

「なんでこの石が欲しいのかは解らないけど、諦めてくれな・・・さそうだな」

どうしたもんかとジュエルシードを指の間で転がしていると、誤って川に落としてしまった

「いかんいかん・・・ん?」

慌てて落としたジュエルシードを拾おうとする、川全体が淡く光りだし

「なぬ!？」

川から巨大な怪魚が姿を現した

「マジですか? ってか、人の気配すらなかったのになんで魚がいたんだ?」

「・・・もしかして」

「心当たりがありそうな顔だな? 教えてもらってもいいか?」

「・・・稀に動物にも魔力を持ったものがある。多分、あれもそうなんだと思う」

少女は痛む額を手で押さええながら悠一の問いに答えた。すると、怪魚は大きく息を吸い込む、その動作を見て何が来るのかを察した悠一は少女を抱え、その場から離れると、怪魚は口から高圧水流を吐き出した

「あぶねえ、あぶねえ。気づくのがあと少し遅かったら風穴開いてたな」

「あ、あの」

「ん?なんだ?」

「た、助けてくれたのは嬉しいけど・・・この格好は」

現在、少女は悠一にお姫様抱っこされており、顔を赤くして降ろすように言う

「ああ、すまんすまん。声をかけてたら間に合わなかったからな」

悠一は抱えていた少女を降ろすと怪魚を見る

「まさかまたリアルモンハンをすることになるなんてな。来い天狼」

悠一は霊装を展開し、私服を戦闘服に変える

「（俺じゃあ倒してもジュエルシードを封印することはできない。なのはちゃんに連絡をしようにもこの結界のせいで電波が届いていない状態。八方塞がりな状況だが）なるようになるだろう」

先のことよりも今（現在）のほうが大事だと思った悠一は刀を構え、モンハンを始めた

「す、すーい」

少女は空で怪魚となった魚と戦う悠一を見てそれしか言えなかった。相手のわずかな動きで行動を先読みして回避と攻撃を行う。簡単そうに見えるが、少しでも読みを間違えれば大ダメージを負うことになる

「固いな。まるで鋼鉄を叩いてるみたいだ」

悠一は軽く手を振るって痺れを取り払うと、時計を見て現在の時刻を確認する。その行動を好機と判断したのか怪魚は体当たりを行うが

「重力制御、倍化」

悠一は自身の重さを倍にし、片手で怪魚の体当たりを受け止めた

「遊びはここまでだ」

悠一は受け止めたほうの手を引き強烈な拳撃を打ち込み怪魚を殴

り飛ばす。そして魔力とは違う力、気を使って宙に浮かぶと悠一は抜刀の構えをとる

「散りゆくは群雲、咲き乱れるは桜花・・・伍の型 奥義 桜花残月
”

悠一は異世界で手に入れた技能の一つ “虚空” を使い、空を蹴って怪魚に近づき一瞬4撃の抜刀術を叩き込んだ

「ふう~~~~~狩り、完了だ。そこの君」

「.....」

「はあ~~~~」

怪魚が完全に気を失ったのを確認すると悠一は空に浮かんでいる少女に話しかけるが、返答を返ってこなかった。ボーっとしている少女に気づいた悠一は少女に近づき、顔近くで指を鳴らす

「つひや!?!」

「ボーっとしてるところ悪いが、あの石を集めているってことは君、封印できるんだよな?」

「え、は、はい」

「なら封印してくれないか?俺のじゃあれは封印できないからよ」

「・・・解りました。ジュエルシード、封印」

少女は手に持つ戦斧を怪魚に向けると、黄色の光が怪魚に向け放たれ、怪魚だったものは魚と石に解れた。悠一は地上に降りると封印されたジュエルシードを拾った

「この結界解いてくれないか?急ぎの用事があるんだ」

「は、はい」

少女は地面に降りると戦斧で軽く地面を小突く。すると、周囲を覆っていた結界が解かれた。結界が解かれたことを確認すると悠一は霊装の展開を解き、戦闘服を私服へと戻し、はやての迎えに行こうとするが、何を思ったのか

「ああ、そうだ。ほれ」

ジュエルシードを少女へと投げ渡した

「え?え?ど、どうして?」

「封印してくれた礼だ。んじゃまたどこかで会おうぜ」

そういうと悠一を手振りながら帰っていった

温泉旅行

「……………」

謎の少女との出会いから数日後、悠一は修行用の時空間で標高9350メートルの山の山頂で出来上がった氷の切っ先の上に座って瞑想を行っていた。切っ先が尻に触れている状態で瞑想など普通なら無理なのだが、悠一は身体強化魔法で身体を強化し、切っ先に座っているのだ

「……よし、やるか。目標は5分だ」

瞑想が終わったのか悠一は立ち上がるとタイムを決め、少し離れた場所にある氷山に向かって跳ぶ、身体強化と集中力、重心、その3つが少しでも綻びれば、足の氷山の切っ先が突き刺さり大けがをする。そんな緊張感漂う中、悠一は氷山から氷山へと跳び移っていく。そして、

「ゴール。タイムは……………5分30秒か。まだまだだな」

目的地までたどり着くが、自分が決めた時間が過ぎたことに苦虫をかむが、

「飯の時間か」

セットしたタイマーが鳴るのが聞こえると、修行を切り上げ、元の空間へと戻っていった

「……ちそうさまでした」

「そういえばユウ君、準備はもうできたんか？」

夕食を食べ終え、食器を片付けながらはやてが悠一に尋ねる

「温泉旅行の準備だろう？もうできてる。そういうはやてはどうなんだ？」

「私もできとるで。でも楽しみやなくく温泉なんて久しぶりやもん」

よほど楽しみなのかはやては終始笑顔でいる

「そうか」

表情に出さずにいるが悠一も楽しみだったりする。時空間にある訓練場にも温泉はあるが旅で入る温泉は本人曰く別らしい

「本当に誘ってくれありがとうございます土郎さん」

翌日、土郎が運転する車に乗って温泉街へと向かっている後部座席ではなのは、アリサ、すずか、はやての4人が楽しそうにしゃべっていた

「はは、構わないよ。旅行は大勢いたほうが楽しいしね」

「悠一君、暇ならお姉さんの話し相手になつてよ〜」

土郎に礼を言い、座席に戻ると、なのはの姉であり、恭也の妹である高町美由紀が後ろから悠一に覆いかぶさった

「・・・美由紀さん、重いです」

「む、女の子に対して重いなんて禁句だよ」

「でも、重いものは重いんです。そんなに暇なら忍さんとも話せばいいじゃないですか？」

「忍さんは恭ちゃんとおしゃべりしてるからね〜邪魔しちゃ悪いでしょう？それにしても服の上からだど解らなかつたけど悠一君ってその年の割に結構筋肉ついてるね？着やせするタイプなのかな？」

服越して悠一の鍛えられた肉体を触り、興味がわいた美由紀は隅々

まで調べようとしたとき

「やめろ」

「はう!？」

恭也が美由紀に頭部に手刀を落とした

「な、なにをするの恭ちゃん?」

「年下でもそれ以上はセクハラだ」

「ただのスキンシップなのに」

両ほほを膨らませながら美由紀は座席に戻った

「まったく、すまないな悠一君。家の美由紀が迷惑をかけた」

「いえ、特に気にしてませんから大丈夫ですよ」

恭也に返答すると、悠一はこれから行く温泉街のことが乗った本を開き、おすすめの名店欄を再度、読み始めた

「ふ、ふ、ふ、ふ」

昼過ぎに温泉街に到着した一行は宿近くにあった飲食店で昼食を食べると夕飯まで各々好きなことをして時間を過ごす中、悠一はガイドに書かれていた散歩コースでロードワークを行っていた

「ふう~~~~山に近いただけあって空気が澄んでいてうまいな」

湖が一望できる休憩スポットにたどり着いた悠一は一休みするため近くにあったベンチに座る

「.....よし誰もいないな」

悠一は眼を閉じて周囲に誰もいないことを確認すると、魔力を足に集中させて湖の中央付近まで歩くと、構えをとる

「こおおおお~~~~破甲拳」

一呼吸おくと悠一は湖めがけて拳を振り下ろす。拳が水に触れると、豪快な音と共に水がはじけ飛び、水しぶきが上がる

「っし」

宙に上がった水飛沫一つ、一つめがけて悠一を拳を当てていく

「こおおおお〜」

すべての水飛沫を拳で弾くと息を吐いて残身を行い、ほとりに戻ると

「ここだと思っただけどなく」

「何だったんだろうね今の水柱は？」

「ん？」

「え？」

「何？知り合いなのフェイト？」

茂みのほうから出てきた少女の一人と顔が合い、互いに固まってしまった

真夜中の戦い

「……」

「(まさかこんなところで遭遇するなんてな)」

この間、ジユエルシードの事件で出会った少女と再会した悠一

「どうしたのフェイト？」

「アリシア、目の前にいる男の子がああ時に話した子だよ」

「え？この子が？」

アリシアと呼ばれた少女はフェイトと呼んだ少女の話の聞くと興味深そうに悠一のことを見る

「ふむふむ。うん！合格!!君にならフェイトのことを任せられそうだね」

「は？」

「ア、アリシア？」

「まあ、私が合格だって言ってもママが首を縦に振るかどうかは解らないけどね」

「いや、だから何のこと言ってるんだ？」

「ん？そんなの決まってるじゃないの……フェイトのお嬢さん候補についてだよ！この子ったら内気で自分に自信がないから姉である私が彼氏兼お嬢さんを探してあげてるんだよ」

「……話についていけん」

少女の話聞いた悠一はため息を吐いてロードワークを再開しようとする

「ちよつと待って！」

「何だよ？」

「ほら、フェイト。今度会ったら名前を聞くって言ってたじゃない」「う、うん。えつと、私はフェイト、フェイト・テスタロッサです。

あ、貴方の名前を教えてくださいませんか？」

「……悠一、氷室悠一だ。んじゃ」

少女、フェイトに自分の名前を言うと悠一は今度こそロードワークを再開した

「あー私がさつき言ったこと考えておいてね〜!!」

「月を見ながら飲む一杯は格別だな」

深夜、皆が寝静まったのを見計らって宿の屋根上で悠一は夜空に浮かび星々と月を着に酒・・・ではなく、炭酸飲料を飲んでいた

「本当は酒を飲みたいんだが、精神年齢は大人でも見た目は子供だからなく〜。それにしてもなのはちゃん達元気なかったが何かあったのか?」

ロードワークから帰ってきた悠一が目にしたのは落ち込んでいたなのは、アリサ、すずかの3人だった。悠一に気づいたのか卓球で勝負しようといわれ、勝負したのだが、その試合で何かを振り払おうとしているみたいに悠一は思えた。すると

「ん?なんだあの光は?」

ロードワークで行った湖から光の柱が上がるのが見え、宿から防護服に着替えたなのは、アリサ、すずかの3人が飛んでそこへ向け飛んでいった

「なのはちゃん達が飛んで行ったってことは今の光はジュエルシードか」

恐らくロードワーク中に会ったフェイトともう一人の少女と遭遇して戦闘になると考えた悠一は自分の加わろうかと思っただが

「ここは様子見といきますか」

傍観に徹することを決めると悠一は空に浮かび上がり、なのは達の後を追った

「ピンクに黄色、赤、紫、水色奇麗だねえ〜」

夜の空を6色の光が駆け、ぶつかるとさまを肴に悠一は炭酸飲料を飲む

「ん〜少し押され気味・かな?」

悠一が冷静に状況を分析していると、何か背後から悠一に襲い掛かるが

「っ!?!」

その攻撃は悠一が張った風の障壁に阻まれた

「随分なご挨拶だな?こっちはただ観戦してるだけだっていうのに」

「・・・アンタ、何者だい?」

「ただの傍観者だ今回はな」

「・・・アタシの中の何か告げる。アンタは危険だつて」

「動物の勘って奴だろうな。動物は人間よりそういつた勘が高いらしいからな。でも言った通り、今回の俺は傍観者だ。今の言葉を聞いたうえで襲い掛かってくるっていうなら・・・容赦しねえぞ」

「っ!?!」

悠一は自分の襲い掛かった人語を話す狼を軽く威圧する。悠一の威圧に狼は全身の毛が逆立ち身震いする

「お?どうやら終わったみたいだな。結果は・・・なのはちゃん達の負け・・・か」

決着がついたことを確認した悠一は立ち上がると客席として使っていた木のでっぺんから飛び降り、何の問題もなく地面に着地する

「フェイトと、アリシアだったか。2人によろしく伝えてくれ。今日は勝っても今度も勝てるとは限らないってな」

2人への伝言を狼に伝えると悠一は宿に戻るために闇の中に消えた

暴発

「なあ、ユーノ・スクライア?」

「何ですか氷室さん?」

「それってやばくねえか?」

「やばいなんてもんじゃありませんよ。少しでも加減の間違えれば暴走して大惨事になります」

ジュエルシードを探しにいろんなところを探し回っていた悠一、なのは、ユーノの3人。アリサとすずかも手伝おうとしたがバイオリンの稽古のために断念した。遅くなってきたためなのは家を家に帰らせ、ユーノと2人で捜索の続きをしようとした矢先、膨大な魔力が街中に流れる。ユーノが慌てて結界を張ったために一般人に被害は及ばなくなった。今起きていることをユーノから聞いた悠一は冷や汗を流しながらほほを引きつらせる

「悠一お兄ちゃん、ユーノ君!」

「なのは、急いでレイジングハートを起動して!そして封印の準備を」

「うん」

引き返してきたなのはに声をかけられたユーノはなのはに指示を出す。ユーノの言う通りRHを起動すると、空の飛び上がり封印の準備を行う。そして、街の一角からジュエルシードの発動を示す光が天に向かって伸び上がった

「なのは!」

「うん!ジュエルシード・封印!」

ユーノに言われ、光が上がった地点めがけてなのはは封印砲を放つ。それと同時に別地点からも封印砲が放たれ、同時に着弾しジュエルシードを封印した

「ついで？・なんでこうなるんだ？」

悠一は空と地上で行われている魔法少女同士の戦いと使い魔（一人は違うが）の戦いを見てあきれる

「まあ、同じ得物を狙ってる者同士、勝ったほうがそれを手に入れるのが戦いの常識だからね〜」

「・・・妹が戦ってるっていうのに姉のお前は参加しないでいいの？」

「温泉の時にいた2人がいたら参加してたけど、今日はいないみたいだし。あの子には私もすこ〜し興味があるけど珍しくフェイトが意識してるみたいだから譲ってあげることにしたの」

悠一は自分の隣で呑気にプラスチック容器に入ったパフエを食べているアリシアに話しかけるもアリシアはあっけらかんとした様子で答える

「さてと、ちよ〜と食後の運動に付き合ってもらおうよ」

パフエを食べ終えたアリシアはど拳銃型のデバイスの銃口を悠一に向け、至近距離からの射撃魔法を放つも、悠一はそれを難なくかわす

「ずいぶんなご挨拶だな」

「油断をさせていたつもりだったんだけどな〜」

「常時戦場それだけだ。こい “天狼”」

悠一は霊装を展開し構える

「そつちは食後の運動といったが、俺は戦う以上、加減はしない。たとえば、戦う相手が女、子供、老人だろうとな」

「フォトンランサー・・・ファイア！」

数秒の静寂ののち、アリシアは自身の周囲にスファイアを生成すると、そのスファイアから槍のような魔力弾と射撃魔法を連射する

「辻風」

悠一が刀を振ると無数の風の刃が巻き起こり、アリシアの魔力弾、射撃魔法をすべて斬り裂いた

「肆の型 “破斬”」

アリシアの攻撃をすべて防ぐと悠一は八相の構えをとり、背部に集めた風を噴射してアリシアとの距離を詰め、刀を振り下ろし斬り抜けるも

「・・・あ、あ、あつぶなかつた〜!?」

悠一が攻めに転じる際、いやな予感がしたのかすぐさま、何重もの障壁を張ってアリシアは悠一の剣戟を防ぐことに成功した・・・とはいえなかった

「(何重ものシールドを張ったっていうのにそれをすべて打ち破ってくるなんて。もし張ってなかったら、これだけじゃすまなかったね、絶対。しかもフェイト以上の速さ)」

今の一撃で悠一の実力がいやというほどわかったアリシアは距離をとり、銃を二丁にすると射撃魔法を連射して悠一を近づけさせないように牽制しながら、仕掛けを行う

「遅い」

悠一は弾幕の嵐の中を突っ切りアリシアの背後に移動して刀を振るうも、アリシアは屈んでそれをかわすと前回転し、ゼロ距離といつてもいい距離から射撃魔法を悠一に向け放つも、これまでの戦いで培った悠一の直感でかわされてしまった

「ええ〜〜今の距離の射撃も躲すって・・・ユウイチって人間?」

「れっきとした人間だ。っ!」

アリシアの問いに答え、追撃しようとする悠一だったが体が動かさなくなった

「なんだこれは?」

「バインド。相手の動きを止める魔法だよ。いや〜〜仕掛けが間に合ってよかったよ」

悠一が体を動かさなくなった原因を探していると、両足に立方体のようなもの包まれていた。それに不思議がっているとアリシアが回答する

「(仕掛け?) まさか、見えないように設置したっていうのか?」

「正解。バインドは使用者が仕掛けたい場所に設置することができ

るんだ。まあ、相手をその場所に移動させないと発動しないんだけど」

「なるほど、俺はまんまとお前の策にはまったってわけか」

「その通り。そして、ここは私の距離！今必殺の、クロスマツシャー！！」

アリシアは目の前に魔方陣を展開すると、二丁銃からチャージされた魔力球が魔方陣にあたるとそれぞれがビームのような形状となり螺旋をえがきながら悠一に迫る

「（足は動かせないが、上半身は動かせるいたいだな）ふうくくくく」

悠一は刀を上段で構えると眼を閉じて軽く深呼吸を行い、心を落ち着かせる。そして、目を見開くと、魔力で作った足場で踏ん張り、力を足先から下半身、下半身から上半身、上半身から腕へと伝らせる

「参の型・断空」

そして、振り下ろされた刀は迫った魔力砲を一刀両断した

「うつそおくくくく!!」

「・・・我に断てぬもの無し」

どこぞの親分と同じような台詞を言いながら悠一は魔力を放出して、足を縛っているバインドを強引に吹き飛ばした

「わああ（全然勝てるイメージが浮かばない）」

アリシアが悠一の出鱈目さに呆れ、勝てるイメージが浮かばずほとんど困っていると、衝撃波と共に膨大な魔力が一気に流れてきた

「何だ!?!」

「・・・ちよつとフェイト、今の話本当?」

「何か解ったのか?」

「そ、それが・・・フェイトとあの白い魔導士が封印したジュエルシードをとろうとお互いのデバイスでジュエルシードを挟んでぶつかった瞬間、ジュエルシードの魔力が暴発しちやったみたい」

「・・・それ、やばくないか」

「うん、やばいね。私たちがジュエルシードを探し当てるときに魔力を流した時よりも」

「・・・急いで現場に向かうぞ！」

「了解!!」

アリスアの話聞いた悠一は急いでジュエルシールドのある場所に向け、飛翔した

魔力の結晶

「おいおい。何をやってたらこうなるんだよ？それにこの魔力」

封印したジュエルシールドが暴発した知らせを聞いた悠一はアリスアとの戦闘を一旦やめ、一緒にジュエルシールドのある場所まで来たのだが、その場の光景とジュエルシールドから漏れ出す魔力に苦笑いする

「フェイト！」

アリスアは少し離れた場所で倒れているフェイトを見つけると急いで向かった。悠一も倒れているのはを見つけると移動する

「大丈夫かなのはちゃん？」

「ゆ、悠、一、お兄・・・ちゃん」

「(デバイスの損傷も凄いが、なのはちゃんも相当なダメージを負ってるな。至近距離で衝撃波を直に受けたせいだな)よく頑張ったゆっくり休みな」

なのはの頑張りを労うと悠一はなのはの首筋を軽く叩き、気を失わせ、手当てを行う

「ちよつとフェイト!?あなたまさか!」

「無茶だよフェイト!」

「ん?」

なのはの手当てを行っていると、アリスアと使い魔の慌てた声が聞こえ、振り返るとフェイトがジュエルシールドめがけて猛スピードで突っ込んでいくのを確認した悠一。フェイトはそのスピードのまま両手で暴発しているジュエルシールドを掴んだ

「おいおい、まさか」

フェイトの行動を見て何をしようとしているのかを理解した悠一は慌ててフェイトのところに向かう。そして、

「ストップだ。それ以上やるとただじゃすまない」

ジュエルシールドの魔力で両手を弾かれ、もう一度抑え込もうとしようとしたところで悠一はフェイトの手をつかみ、やめさせた

「止めないで！早く抑え込まないと」

「それは俺も分かってる。だから俺に任せろ」

悠一はフェイトの手を離すと両手を合わせた

「(これだけの膨大な魔力だ。行けるだろう)まさかこいつを使うことになるなんてな、重力制御、空間遮断」

悠一は指にはめている指輪型の宝物庫から一つの道具を取り出すと宙に放り投げ、異世界で手に入れた2つの魔法、重力魔法でジュエルシードが放出する膨大なエネルギーを一点に集束させ、空間魔法でその道具とのゲートを作ると、ジュエルシードのエネルギーを道具に注ぎ込む

「(なんて量だ。持ってくれよ俺の魔力)」

魔力を多く消費する2つの魔法の同時使用により悠一の魔力はどんどん減っていく

「(だめ・・・だ。もう、魔力・・・が)」

悠一の魔力が底を尽き掛けるぎりぎりのところで、放出されるエネルギーが途切れた

「はあ、はあ、はあ、ギリギリだったぜ。それにしても随分とでかい結晶ができたな」

悠一は回収した道具の中にできている結晶の大きさを見て驚く

「フェイト、手を見せてみる」

「え？」

「手を見せろって言ったんだ」

悠一の言う通り、フェイトは両手を悠一に見せる

「こいつは酷いな。痛むだろう？」

「・・・うん」

「じつとしてろよ」

悠一は宝物庫から再生魔法が生成された塗り薬を取り出すと、傷ついたフェイトの手に塗ると、傷が治っていく

「・・・凄い」

大怪我ともいえる傷がみると治っていくのを見てフェイトは驚く

「これでよし。あとは」

怪我の治療を終えると、悠一はポケットから包帯を取り出し、巻いた

「完了だ。あと、これを渡しておく」

治療を終えると、悠一はクリームの入ったケースをフェイトに渡す
「朝と寝る前に必ずそのクリームを塗れ。そうすれば3日ぐらいで完治するはずだ」

「う、うん。ありがとう」

「じゃあな。あんま無茶するんじゃないぞ」

フェイトの頭を軽く叩くと悠一は眠っているのはを回収して帰っていった

ありふれた日常2

「ただいま〜」

「あらなのは、お帰り」

翠屋のドアが開き制服姿のなのはが元気よく入ってきた

「お帰りなのはちゃん」

テーブルの後片付けをしていた悠一も桃子、同様、なのはを出迎えた

「怪我のほうは大丈夫か？」

「はい。悠一お兄ちゃんがくれた薬を飲んで、ぐっすり寝たら治ってました。あれってどこで買ったんですか？」

「あれは俺、特製の薬だ。どこにも売ってない」

「へえ〜。何を入れてるんですか」

薬の材料が気になったなのはが尋ねると

「聞きたいか？」

「や、やっぱりいいです」

あくどい笑みを浮かべる悠一に焦り、なのはは薬の材料を聞くのをやめた

「まあ、体の害になる物は使っていないから、それだけは安心していいぞ。いらっしやいませ〜」

来客を知らせる鈴の音が鳴り、悠一が出迎える。だが、やってきたのはお客ではなく

「なのは〜〜来たわよ〜」

「なのはちゃん」

「アリサちゃんにすずかちゃんか、いらっしやい」

アリサとすずかだった。私服姿からみて一度家に戻ってから翠屋に来たようだ。2人は悠一に挨拶をすると、なのはが座っている席に行き、鞆からノートと紙を取り出した

「(宿題か。そろそろあれが出来上がるし、持って行ってあげるかね)」

勉強を始めた3人を見ながら悠一は厨房へと入っていった

「勉強、お疲れさん。これは俺からのサービスだ」

悠一は人数分の紅茶とあるものをなのは達に差し出す

「これって」

「アップルパイ？」

「あれ？うちのお店にアップルパイなんてあつたかな？」

差し出されたアップルパイを見てなのは首を傾げる

「このアップルパイは俺が作ったもんだ。久しぶりに食べたくなつてね、桃子さんに許可を貰って作ったのさ」

「これ、悠一さんが作ったんですか!？」

「まあな。久しぶりに作ったからうまくできたか解らないが、食べてみてくれ」

「じゃ、じゃあ・・・」

「いただきます」

3人はフォークを手に取り、出来立てであろうアップルパイを口に入れる

「こ、これは!？」

「中は砂糖煮のリンゴでしつとり、外はサクツと香ばしく」

「リンゴは甘さとほろ苦さの塩梅が見事に調和して」

「「おいしい〜」」

「本当ね」

「これ、うちのメニューに加えてもいいんじゃないかな？」

「いつ帰ってきたんですか美由紀さん？」

3人に混ざりカウンターで桃花といつの間にか帰ってきていた美由紀がアップルパイを高く評価し、店のメニューいれようかどうか相談し始めた

「それじゃあ、お先に失礼します」

「お疲れ様悠一君。また明日もお願いね」

「はい。なのはちゃん達もまたな」

仕事も終わり、桃花やなのは達に別れの挨拶をすると、悠一は家へと帰る。普段なら・・・店から出ると悠一は携帯を取り出し、地図に切り替えると矢印が表示される

「こっちか」

悠一は表示される矢印の指示通りに歩き出した

「(こ)・・・みたいだな」

地図と矢印を頼りに悠一がたどり着いたのは高級マンションの前

「とにかく行ってみるか」

自動ドアを潜りマンション内に入った悠一だったが、防犯のためかカギを持っていないと中には入れないようになっており、どうしようか悩んでいると、丁度、住んでいる人が出かけるために自動ドアを開けたため、悠一はそれに便乗して中に入り、エレベーターで気配がする階のボタンを押し上に上がっていく。目的の階に到着し、エレベーターから降りて、数歩歩いた先の部屋のインターホンを鳴らす

「は～～い、どちら様・・・ん？」

「よお」

「あ、あんたは!?!」

ドアを開けた人物は悠一を見ると数秒固まるが、慌てて開けたドアを閉めようとするが

「お邪魔しま〜す」

それよりも早く、悠一が家の中へと入る

「アルフ？ いったい誰が来た・・・の？」

「どうしたのフェイト？ いったい誰が・・・へ？」

リビングらしきところに着く、フェイトとアリシアがおり、悠一を見て目を見開く

「ずいぶんいいところに住んでるなお前ら」

「あんた！ 一体何しに来たんだい!？」

悠一に追いついたアルフが拳を構えながら訪ねる

「何って・・・陣中見舞いだけど？ それよりフェイト、なんだその手は？」

アルフの問いに答えた悠一はギブスのように包帯を巻かれているフェイトの手を指さす

「何って包帯を巻いた状態だけど」

「・・・誰が巻いたんだ？」

「あたしだよ」

悠一の問いにアルフが自信満々に答える

「はあ~~~~俺が巻きなおしてやる」

悠一は持ってきた紙袋をテーブルに置くと、フェイトの手を取り、ソファアまで連れて行くと座らせ、巻かれた包帯を外し、巻く前に手の状態を確認する

「言った通り、ちゃんと薬は塗ってるみたいだな」

「う、うん。言われた通り、朝と寝る前に塗ったよ」

「ならいい。アリシア、こっちに来て俺が包帯を巻くのを見ておけ。あの狼に任せたらさつきみたいになるからな」

「はいは~~~~い」

悠一はアリシアに声をかけ、近くまでやってくるのを確認すると、包帯を巻き始めた。包帯を巻く作業は数分とかからずに終わった

「これで終わりつと。どうだ、さつきよりは動かしやすいだろう？」

「うん」

フェイトは手を握っては開きを繰り返し、感触を確かめながら答えた

「んじやあ、俺は帰る」

「え？もう帰るの？」

「陣中見舞いに来ただけだからな。あの紙袋の中にはケーキが入ってる。3人で仲良く食べな。それとお前たちがここに住んでるってことはあの3人には言わないから安心しろ。じゃあな〜」

そういうと悠一はフェイト達の家からおいとまし、家に戻った。そして、フェイトとアリシアはせっかくだからと悠一が持ってきたアップルパイを頂き、そのおいしさに心を鷲掴みされた。最初こそは「敵の持ってきたものなんて食べれるか」と言っていたアルフだったが、フェイトからもらった一口で心を鷲掴みされ、自分の分を食べ始めた

「う〜う〜ん、ユウ君が作ったこのアップルパイほんまにおいしいな〜」

「そんなに食べると夕飯食べれなくなるぞ？」

「大丈夫、女の子にとってケーキは別腹や」

「さいですか」

そして、八神家では、はやてが至福の笑みを浮かべながらアップルパイを食べていた

あり得なかつた再会

『それにしても0000ちゃんは凄いな。国内、海外の大会を総なめ、今度のオリンピックの代表の候補にも挙げられてるんだから』

『・・・ありがとう。でもあたしとしては歌に集中したいんだけどな。そういう0000のほうはどうなんだよ?』

『私? 私は0000ちゃんや悠一君みたいね、これといったものがないんだよね』

『0000は何でもそつなくこなすからな。料理人にでもなればいいんじゃないか? 0000の料理はうまいから流行ると思うぞ?』

『お母さんからはいい会社に入りなさいって言われてるんだけどね。そういう悠一君のほうはどうなの?』

『剣術の大会なんてないから剣道の大会に出てはいるが・・・なんか違いく感じるんだよね』

『ここに誓おう。俺はお前を主と決め、仕えることを。この身とこの剣はお前とお前の大切な者の為に』

『そこまで硬くならなくてもいいけどなく。俺としては、切磋琢磨し、互いに競い、高めあう関係になりたいと思ってる』

「……随分と懐かしい夢だったな」

小鳥のさえずりで目を覚ました悠一は身体を伸ばしながら見ていた夢を思い出し、感傷に浸る

「なんで今更、あんな夢なんて見ちまったんだ？」

閉じていたカーテンを開き、雲一つない空を眺めながら、悠一は見ていた夢について考えるが、答えは出ず、悠一は日課のランニングに行くために寝間着からジャージに着替え始めた

「どんだけいるんだこいつら？」

ジュエルシールドが発動したとなのは達から連絡を受け、公園にやってきた悠一が見たのは無数の木の異形たちだった

「とりあえず数を減らすか。雷吼砲」

悠一が手を木の異形達に向けかざすと、特大の雷球が放たれる。雷球に触れた異形達は一瞬で焼け焦げ、灰へとかわる

「悠一お兄ちゃん／さん」

「3人ともよそ見をするな」

目の前の大群からの数秒とはいえ意識をそらした3人に悠一は注意すると、霊装を展開して薙ぎ払うように振るい、5体纏めて斬り払った。視線を少しだけ逸らすと、別の場所でフェイトとアリシア、アルフと呼ばれていた狼女も木の異形達と戦闘を行っているのが見える

「ユーノ・スクライア、ジュエルシールドが宿主としているのはどれなのか解っているのか？」

「はい。奥にいるあの大きな木です」

ユーノの言葉を聞き、木の異形を斬り払いながら奥を見ると、巨木

「ストップだ！時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。速やかに戦鬪を・・・」

「「クロノ!?!」」

「アリシア、フェイトにアルフ？なぜ君たちが地球に・・・」

「(知り合いか?)」

口調から今現れた少年とフェイト達が知り合いなのかと悠一が思っていると、何かが自分めがけて飛んでくる音が聞こえる。悠一は大太刀を振るい、斬る。斬られた飛来物は露散して消える

「『白雷』」

気配感知と魔力感知で相手の場所を特定した悠一はそこに指向け、指先からレーザーのような雷撃を放ち攻撃するも、相手は消えて躲した

「(今のは空間魔法と同じ原理の移動ほうか?)」

感知した気配が別の場所に一瞬で移動したことを感じた悠一はその場所に指を向け、魔法を放とうとしたが、別の場所から第2の襲撃者が襲い掛かってくる。悠一はその攻撃を捌き、肘鉄を繰り出す片手で受け止められた。襲撃者から距離をとると悠一はその人物と一進一退の攻防を行う

「(妙に見覚えのある太刀筋だな)」

対峙している者の剣捌きに見覚えを感じた悠一は過去の記憶をたどっていると、悠一はその者に蹴り飛ばされ、置かれてあったゴミ箱とぶつかる

「~~~~~」

久しぶりに味わった痛みに悶えていると、何の前触れもなく、上空に人が現れ、手に持っていた弓から魔力で生成した矢を悠一に放つ。放たれた矢は途中で無数に分裂する。悠一は前回転して矢を躲し、反撃しようとするが前方から蹴り飛ばした者が斬りかかってき、後方には地面に着地した者が悠一に向け、矢を放とうとする。だが、それよりも早く両者の腹部と眼前に雷で構成された刃が突きつけられた

「・・・鈍ってはいないようだな」

「お前は・・・土!?!」

急停止した際に被っていたフードが外れ顔があらわとなり、その顔を見た悠一は驚く

「驚くのはまだだぜ悠一？」

「その声・・・まさかクリス!？」

聞き覚えのある声に振り返り、さらに驚く悠一

「(どういうことだこりゃ?)」

あり得るはずのない友と幼馴染との再会に悠一の頭はオーバーヒート寸前だった

あり得なかつた再会・2

「悠一君の浮気者ー!!」

「ケツポーン!」

悠一は見覚えのある少女に会って早々、殴り飛ばされた。なぜそんなことになったかという、話は数十分ほど前まで遡る

「まるでSF映画みたいな光景だな」

クリスと士、2度と会うことはないだろうと思つてた2人との再会にフリーズしている間になるのは、アリサ、すずか、ユーノ、フェイト、アリシア、アルフラと共に時空管理局と呼ばれる組織、簡単に言えば警察のようなものが所有する艦に連れてこられた

「宇宙の景色を飛び越えてこんな景色を見ることになるなんてなく。人生何があるかわからんな」

「あんた、本当にフェイトやアリシアと同じ子供かい?言ってることが爺臭いよ?」

「失礼な犬だな。どこからどう見ても子供だろう(まあ、精神年齢は大人だが)」

「犬つて言うな!」

窓の外の景色を見て感傷に浸っている悠一にアルフが突っ込み、悠一の一言が発端で口喧嘩が始まりそうになったが

「コントなんかしてないで行くぞ悠一」

「いででで?!クリス!そこ(耳)は引つ張る場所じゃない!」

「クロノ執務官、申し訳ねえが。こいつを連れて行ってもいいか?個人的に話したいんでな」

「あ、ああ、それは構わないが。知り合い・・・なのか?」

「そんなところだ。お前ら、これ(悠一)を借りていくぜ。行くぞ悠

一

「いでで!? 耳を引つ張手歩くな! ちぎれる、ちぎれるから!」

「うるさい!」

有無を言わせずにクリスは悠一の耳を引つ張つてどこかへと連れて行った

「着いたぞ」

「いでで、本当にちぎれるかと思った」

引つ張られていた耳を悠一が涙目でさすっていると、クリスは扉の前にあるパネルを操作してロックを解除する

「ほら、入れ」

「入れてって……ここはお前の部屋何だろう? なんで俺が先に入らなきゃいけないんだよ? いつもなら『少し待ってろ』って言って入らせなかっただろう」

「いつの話をしてるんだよ。確かにここはこの艦でのあたしの部屋だけど、正確にはあたし達の部屋だ」

「あたし達?」

「いいからさっさと入れ」

「解った、解ったから。まったく、死んでもそのツンデレみたいな性格は変わってねえな」

クリスに催促され、悠一は渋々と部屋に入り、中にいた誰かに殴られたのだ

「つゝつゝつゝ! 今日は何日か何か?」

「すつきりしたか?」

「うん。って言ってもそこまで怒ってたわけじゃないんだけどね」

クリスの問いに答えると悠一を殴った少女は悠一に歩み寄り、抱き

着いた

「久しぶりだね悠一君」

「・・・明日奈？」

見知らずの少女に抱き着かれたことに驚く悠一だったが、聞こえてきた声、かいだことのある懐かしいにおい、そして、髪色を見て悠一は脳裏に浮かんだ女性の名を呟くと

「うん、正解」

少女「結城明日奈」は悠一から離れ笑顔で答えた

「(クリス、土に続いて、今度は明日奈?) もう何が何だかさっぱりわからん」

「はい、悠一君、クリスちゃん」

「ん」

「ありがとう明日奈」

とりあえず部屋の中に入った悠一は明日奈の淹れた紅茶を飲み、混乱していた思考を落ち着かせる

「混乱してた頭は落ち着いたみたいね」

「少しだけ・・・な。随分久しぶりに飲むが明日奈の淹れた紅茶はやっぱりうまいな。つーか、最後に飲んだ時よりうまくなってないか？」

「そりゃあそうだろう。何せ明日奈は親の反対を押し切って喫茶店を開いて、食通の舌をうならせたんだから」

「まじか？」

「ああ。私も弓だけじゃなくて歌のほうでも大成して、憧れの紅白にも出たぜ」

「ぴゅー~~~~」

自分が無くなってからの2人のその後悠一は驚く

「まあ、あたしも明日奈もやらなかったことが1つだけあったけどな」

「何を？」

「結婚」

悠一が尋ねると2人は口をそろえて悠一をジト目で見ながら言う
「小さいとき約束したでしょう？大きくなったら結婚しようって」

「それ、ガキの頃の話だろうが」

「子供のころでも約束は約束だろ？」

「それなのに悠一君ったら、別な女の子と結婚して、子供まで作って。それを知った私とクリスちゃんの気持ちわかる？」

「そんなこと言われてもな〜って、なんでそんなこと知ってるんだよ!？」

2人の言い分に困っていた悠一だったが、転生先でもことを言われ驚く

「まあ、そのことについては過去のことだし、これ以上とやかく言うつもりはないよ」

「そのかわり、責任は取ってもらおうからな」

「責任？」

「女の子、誰もが夢見るウェディングドレス。それを着させてもらうことだよ」

「言っておくけど、お前に拒否権は一切ないからな」

「・・・はい」

2人に有無を言わせない言葉と笑顔に悠一は了承する以外の選択肢はなかった

好敵手との試合

「こうやって手合わせをするのはいつぶりだろうな？」

「そうだな。お前が決戦に向かう前の調整の時ぶりだな」

「・・・あの時はすまなかったな。お前には苦勞をかけたと思ってるよ・・・土」

「構わん。お前を支える者の一人として当然のことをしたまでだ」

時空管理局が所有する時空航行艦「アースラ」の訓練室で悠一と少年「進藤士」が昔を思い出しながら話をしているが、2人の纏う空気が別のものであった

「さて、昔話はここまでにして始めるか」

「ああ」

「来い「天狼」」

「来たれ「不屈の聖剣（デュランダル）」」

2人はそれぞれ太刀と大剣を展開すると、構える

「この世界にはあっちみたく氷室家は存在しない。だからこっちの肩書を名乗らせてもらう。八葉一刀流皆伝、氷室悠一参る」

「時空管理局嘱託魔導士、進藤士」

「いざ、尋常に勝負!!」

「そう貴方たちの事情は解ったわ」

クロノの案内されたなのは達は広間ほどの広さのある部屋で待っていた艦の艦長「リンディ・ハラウン」にこれまでのことを話していた

「さて、遅くなったけど。改めて久しぶりね、アリシアちゃん、フェイトちゃん、アルフ」

「「お久しぶりですリンデイ／さん」」

「こうやって直接会うのは2年ぶりになるけど、2人とも奇麗になったわね」

「ママの娘ですから」

リンデイの言葉にアリシアは自慢げに胸を張って答える

「どうして3人はジュエルシードを集めていたんだ」

「クロノ、久しぶりの再会なんだからもう少し話そうよ」

「あいにく、今の僕は管理局の執務官としてここにいるんだ。再会の話なら調書が終わったら付き合うさ」

クロノの言葉にフェイト達は悩む。自分たちがジュエルシードを集めていた理由を話すのは問題ない。だが、なのは達3人に自分達に勝ったら集めている理由を話すといった手前、話ずらいのだ。どうしようかとフェイト達が考えていると突如、艦が何の前触れもなく揺れた

「な、何!?!」

「エイミイ! いったい何があった!!」

『大丈夫、大丈夫、襲撃じゃないから安心して』

「じゃあ、今の揺れは何なんだ!」

クロノが急いで通信回線を開くと空中ディスプレイに女性の顔が映し出され、襲撃ではないことを伝える

『う〜くん、口で説明するより、見てもらったほうが早い・・・かな? 私が見ている映像をそっちに回すね』

「・・・何だこれは?」

エイミイと呼ばれた女性が言うと、もう一つの画像が現れ、映し出された映像にその場にいた全員が固まる。映し出された映像には、ロボロになった訓練室の中央で笑みを浮かべながら剣を交えている2人の少年がいたからだ

「五の型『残月』」

「甘い」

試合が始まると同時に悠一は弐の型『疾風』で土に接近し、鞘に納めた太刀を抜刀するも土は大剣で悠一の斬撃を防ぎ

「大地斬」

上段の構えから大剣を勢いよく振り下ろすも、悠一は身体を半身に捻って土の一撃を躲す。だが、土の一撃はすさまじく、訓練場に斬撃痕が残った

「相変わらずの威力だな」

「よそ見をしている暇などないぞ。 大地斬」

「っ!？」

予想外の一撃に悠一は太刀で薙ぎ払うように振られた大剣を防ぐ

「・・・まさか、振り下ろし以外にも繰り出せるようになってただなんてな」

「技の欠点をいつまでも改善しないわけがなからう。今の俺の大地斬に死角はない・・・天翔閃」

土は悠一を蹴り飛ばすと大剣を振るい光の斬撃を飛ばす。蹴り飛ばされた悠一は宙で耐性を整えると、身体を回転させ斬撃を避けると同時に、太刀の峰が光の斬撃に触れるように射線上に置く。斬撃と太刀が衝突すると、悠一はまるでこまのように回転し

「六の型・弧影斬」

その回転の力を利用して、特大の斬撃を土に向け飛ばした

「天翔四剣」

特大の斬撃に対し、土は4つの光の斬撃を飛ばし、悠一の斬撃を相殺することに成功するが

「一の型・螺旋撃」

斬撃の目くらましに使い接近していた悠一の螺旋の力を使った一撃に土を斬られる

「ぐう!？」

幻想形態で試合を行っているため血は出ないが、精神に多大なダ

メージを負う士。だが

「貫突」

「があ!？」

ふんばり、お返しとばかりに大剣を悠一に突き刺す

「つ!零式・破甲拳」

精神にダメージを負った悠一だったが、士同様、ふんばり左手を士の腹部に添え、寸勁を叩きこみ、吹き飛ばす

「ふ~~~~ふ~~~~」

突き刺さった大剣を抜き取る、無造作に放り投げると、大剣は光となつて消えたが、すぐに士の手元に顕現する

「精神ダメージとはいえ、やっぱり腹を突き刺されるのは痛いな」

「それはこっちらもだ」

大剣を支えに立ち上がった士の顔は笑っていた。そしてそれは悠一も同じだった

「雷吼砲」

「神威」

同時に放たれた雷と光の砲撃が中央でぶつかり、爆発する。そして

「はああああああ」

「おおおおおおお」

爆発で生まれた爆煙をつつきり、2人は再び太刀と大剣を交え始めた

「とんでもないね」

かなり離れた場所で2人の戦いを見ていた明日奈はそれしか言うことができなかった

「レベルが違いすぎるな。命のやり取りを行ったことがあるとない

の違いなのかもな」

クリスが冷静に状況を確認していると、青色のリングが2人に巻き付いた

「何をやっているんだ君たちは！アースラを鎮める気か!!」

訓練室に入ってきたクロノが2人を拘束魔法で縛り上げるが

「勝負の・・・」

「邪魔を・・・」

「するな——!!」

2人は力づくで拘束魔法を破壊して、クロノに近づき思いつきり殴り飛ばした

「クロノ!?!」

クロノと一緒に訓練室に入ってきたリンデイが殴り飛ばされたクロノに近づき、安否を確認する

「もう少し斬り合っていたかったが、今の邪魔で気が萎えた。次の一撃でけりをつけるぞ士」

「望むところだ」

悠一の言葉に頷くと2人は距離をとり、悠一は大太刀を八相で構え、士は大剣を正眼で構え、魔力を練る。そして、

「肆の型・雷電斬光!」

「洗風剣!」

魔力が最高潮まで高まったと同時に、悠一は雷を纏わせた太刀を士は光を纏わせた大剣を振った。その衝突はアースラどころか、次元さえも揺らしたとかなんとか

親ばか襲来

「まったくたかが、訓練場を半壊させたぐらいでぐちぐちいう必要ねえだろう」

「お前なあ、普通は半壊するまで戦うか？」

「そうか？俺や土がいた場所（世界）では戦いで訓練場や闘技場が半壊するなんて普通だったぜ？戦う相手によつては氷のフィールドになつたり、マグマのようなフィールドで戦つたりしたこともあった」

「……悠一君がいた世界つてどれだけ危ないの？」

明日奈の治療を受けながら悠一は訓練場を半壊させたことでクロノに説教を受けていた悠一と土だったが、この男、まったくと言っていいほど反省していない

「ここは俺達の常識で戦つてはならないとは常々思っていたが、少々熱くなりすぎたな」

「……確かに久しぶりに強者との戦いにテンションが上がつていたかもな」

土に言われ、渋々と悠一は自分の非を認めた。すると、

「失礼します」

ノック音の後に部屋の扉が開き、フェイトが医務室に入ってきた

「よお、フェイト。他の2人はどうしたんだ？」

「アリスとアルフは私達の今後の行動についてどうすればいいのか尋ねるために母さんに連絡を取ってるよ。私はクロノから悠一が目を覚ましたって聞いて様子を来たんだけだ」

「この通りピンピンしてる。なのにこの安静にしてろつて明日奈やクリス、この艦の医者がうるさくてこうなってる。たかだが、意識がブラックアウトしたただけだっていうのに」

「十分にお医者さんから安静にするよう言われることだと思うんだけど？」

悠一の返答にフェイトが苦笑いする

「ん？」

「どうしたの悠一君？」

「いや、なんか地響きみたいな音が聞こえないか？」

「え？そんな音、聞こえないけど。クリスちゃんはどう？」

「あたしにも聞こえない・・・ちよつと待って確かに聞こえるな。つというよりこつちに向かってくるような」

明日奈の問いに返答しかけたクリスだったが、耳を澄ませてみると確かに地響きのような音が聞こえてくるのが分かった。そして

「フェイト——！！」

ドアが開くと弾丸、いや砲弾のように一人の女性がフェイトに抱き着いた

「か、母さん!? どうしてここ（アースラ）に!?!」

「アリシアから連絡を貰って急いで来たのよ。アリシアからクロノ君のバインドで縛られたって聞いたけど、痕は・・・ないわね。もし痕があったようなら彼を新しい魔法の実験台に・・・」

「・・・誰なのあの人？」

「さ、さあ？」

「言動からしてフェイトの知り合いみたいだが」

「か、母さん。ひ、人、他にも人がいるから」

「え?」

フェイトに言われ、女性は振り返ると、悠一、明日奈、クリス、士の4人が自分達、正確には自分のことを見ていることに気づく。そして

「は、初めまして。ここにいるフェイトとここにはいないアリシアの母、プレシア・テストロッサよ」

「(「なかつたことにした!?!」)」

今のフェイトとのやり取りをなかつたことにして女性 プレシア・テストロッサは悠一達に挨拶を行った。すると、

「プゥレゥシゥアゥ？」

背後に般若を従えたリンデイが医務室に入ってくる

「リ、リンデイ!?!」

「まったく突然やってきたかと思えば・・・来なさい」

「待ってリンデイ！まだフェイトと話したいことがたくさん・・・」
有無を言わせない言動でリンデイはプレシアを引きずりながら医
務室から退出していった

「・・・どの世界にも親ばかっているんだな」

「・・・」

悠一の言った何気ない一言を聞いたフェイトは顔を真っ赤にして
俯いた

少女たちの特訓

「はあ、はあ、もう、無理、なの」

「だ、だらしが、ない、わね、なのは。わ、私、はまだ、いける、わよ?」

「そんな状態で言っても説得力ないよアリサちゃん」

なのはは仰向けで地面に倒れながら過呼吸をし、アリサは四つん這いになりながらなのは同様、過呼吸でいけるとしちようするが、その状態では説得力がないとさすがにつっこまれる

「つと、ゆー、か、すずかは、なんで、平気、なの、よ?」

「疲れてるけど、なのはちゃん、アリサちゃんほどじゃないだけだよ」

「つてゆーか、なんで1000mも走らなきゃいけないのよ?」

「何をするにも体力、持久力は必要だからな」

「皆、お疲れ様。はい、タオルとスポーツドリンクだよ」

文句を垂れるアリサに悠一が告げる。何故、悠一がなのは、アリサ、すずかの3人を鍛えているかという点、3人に頼まれたからだ。アースラでの会合で協力して残りのジュエルシードの搜索、および回収することとなり、予想よりも早くすべてのジュエルシードを回収することができ、一件落着となったのだが、なのは、アリサ、すずかの3人がフェイトとアリシアとの全力の戦いを望んだのだ。フェイトとアリシアもなのは達の望みを了承し、7日後にアースラのスタッフが建設した特設フィールドで戦うことが決まり、その日のうちに3人は悠一に鍛えてほしいと頼んだ

「それじゃあ、これから個別訓練を始める。それぞれの担当を言う

から呼ばれたものはその教官の指示に従うように」

10分の休憩ののち、特訓が再開される

「なのはちゃんの担当は明日奈だ」

「よろしくねなのはちゃん」

「は、はい。よろしくお願いします」

「アリサちゃんは俺な」

「うーくん、喜んでいいのか、悲しめばいいのか悩むわね」

「そこは冗談でも喜んでほしかったんだけど、まあいい。んで、すぐかちゃんはクリスだ」

「よろしくお願いします」

「ビシバシ行くからな覚悟しておけよ」

担当の発表を終えると生徒を引きつれ、悠一達は別れた

「それじゃあ、始めようか」

「はい！」

「なのはちゃんはフェイトちゃんと戦いたいんだっけ？」

「はい。アリサちゃんやすずかちゃんと協力して戦うほうがいいと思うんですけ、フェイトちゃんとは一対一の勝負で勝ちたいんです」

「なるほど、フェイトちゃんの戦いを映像越しで見させてもらったけど、彼女はオールラウンドに戦えるけど、近接戦をメインにしている。中、遠距離を得意としているのはちゃんとは相性がちよつと悪いね。悠一君に聞いたんだけどなのはちゃんって武術を習ってるんだって？」

「はい。でもお兄ちゃんやお姉ちゃんと違って本格的に習ってるわけじゃなくて、ほんの少ししたしなむ程度です」

「じゃあ、フェイトちゃんと戦うことを想定して模擬戦をやるうか。こう見えて私もスピードには結構自信があるからね。ラディアン・ライト」

「レイジングハート」

指導の方針が決めると明日奈となのははデバイスを起動する

「じゃあ、行くよ?」

「はい!」

優しい表情から戦う戦士の表情になった明日奈の問いになのはレイジングハートを強く握りしめて答える

「はあ!」

なのはとの距離を一瞬で詰めると明日奈は長剣を突き出す

「っ!」

武術をたしなんでいることが幸いしたのか、なのはは魔導杖を使ってその突きをさばいた

「それなりに本気で突いたのに防がれるなんて・・・それじゃこれはどうかしら? スターリイ・ティアア」

突きを防がれたことに驚く明日奈。少し笑みを浮かべると今度は星の頂点を描くように5連突きを放つも、なのはは驚異的な動体視力と反射神経ですべての突きを躲した

「(嘘でしょう!?)」

「ええ——いー!」

なのはの並外れた身体能力に明日奈が驚いている中、なのはは魔導杖に魔力を込めおもしろい振り振るうも、後ろに一歩下がられ躲されてしまった

「(嗜んだ程度じゃないでしょう絶対に)」

「そらそら守ってるだけじゃ、あたしには勝てないぞ?」

一方、クリスとすずかの組。明日奈となのはの組と同じように模擬戦をしているみたいだが、クリスが一方的にすずかに攻撃を行っていた

「アイシクルマシンガン」

クリスに言われ、すずかは防御に展開していた氷の盾を分解させ、無数のツララをクリスに向け撃つ

「成程、単発じゃなく、あたしが対処しきれねえほどの量を撃つか。いい判断だが、無駄だ。クラスターアロー」

クリスは大型の一本の矢を射る。射られた矢をクラスター弾のように分裂し、無数のツララとぶつかり、相殺させた

「アイストルネード」

ツララが砕かれ無数の氷結晶が生まれたの遠目からみただけはそれを利用して、氷結晶を操作して局地的な吹雪の竜巻を起こし、クリスを襲う

「(砕かれた氷を使う・・・か。高い魔力制御がなければできねえ芸当だな。だけど) ちよせえ」

クリスは弓の両端に魔力刃を展開すると、その場で一回りしながら弓を振るい、魔力刃で竜巻を斬り裂いた

「良くなってきたじゃねえか。お前みたいな後方タイプは守ることや誰かをサポートすることも大事だが、時には攻めに出なくちゃいけねえ。サッカーのDFが攻めに加わることがあるだろう？あれみただいになれるのが理想だ」

「はい」

「やあああ!!」

「ほいと」

「こんの~~~~!!」

「攻撃が大雑把になってきてるぞ?」

「だったら、当たって、下さい、よ!!」

「それじゃあ特訓にならないだろうが」

場所は変わって悠一とアリサ組。明日奈、クリス組と同じように模

擬戦を行っているが、アリスが自身の攻撃が悠一にひよいひようと躲かれることに苛立っている

「ほれ、足元がお留守だぞ？」

「うひゃ!？」

注意が散漫になっていたアリスに足払いをして尻もちをつかせる

悠一

「うゝゝゝどうして当たらないのよゝゝゝ!!」

「アリスちゃんは動きが直線的なんだよ。だから自分より戦闘経験が豊富な相手や俺みたいに武術を嗜んでいる相手にとっては攻撃が読みやすく、避けやすいのさ」

悠一は何故攻撃が当たらないのかをアリスに教える

「後はすぐにむきになるところを直したほうがいいな。意識が持っていないか、周りに注意が散漫になって、ピンチに陥るからな。今みたい」

「うぐ」

正論を言われ、ぐうの音も出ないアリス

「それじゃあ、今言ったところを注意してもう一回、やるぞ」

「うゝゝはい」

その後、数時間個別訓練を行った後に、なのは、アリス、すずか対明日奈、クリスのチーム戦を行う。それを7日間行い続け、戦いの日となった

本気の勝負

「まさか、あんな決着になるなんてね」

「予想外にもほどがあるだろう」

アースラの管制室で明日奈とクリスは先ほどまで行っていたのは、アリサ、すずかの3人対フェイト、アリシアの2人の決闘を思い出し苦笑いする。7日間の厳しい特訓でフェイト達と互角に渡り合えるまでに成長した3人。一進一退の攻防が続きどっちが勝つてもおかしくない内容だったのだが

「あの魔法は使いどころを見極めるよう指導しないといけないな」

クリスはなのはが最後に放った集束魔法「スターライトブレイカー」が巻き起こした惨状を思い出し、頭を抱える

「味方事だもんね」

「フレンドリーファイアに加え、周囲の建造物の無差別破壊。今後もこっちの事情に関わるのなら直させておかないとな。つたく、面倒ごとを増やしやがって」

「ふふ」

なんだかんだ言いつつ面倒見がいいクリスに明日奈は笑う

「それよりそろそろ始まるみたいだよ」

「あの5人の決闘の熱気に当てられて疼くなんて、とんだ戦闘狂（バトルジャンキー）だな」

修復を終えた戦闘フィールドで相對する悠一と士を見てクリスはほとほとに呆れた

「こんのくくおバカくく!!」

「いはい、いはいよ、はりはちゃん（訳、痛い、痛いよ、アリサちゃん）」

所変わって、医務室では憤怒の形相のアリサがなのはのほほを思

いつきり引つ張っていた

「な・ん・で！私たちまで巻き込んでるのよ!!」

「ほ、ほんなこといはれても（訳、そ、そんなこと言われて）」

「荒れてるね〜アリサ」

「あんなことが起こったんだから当然といえば当然だけど」

その光景を少し離れた場所ですずか、フェイト、アリシアの3人が眺めながら話していた

「それにしてもたった1週間で追いつかれるなんて、ちよつとシヨックかな〜。もしかしてなのは達つてこの前漫画で読んだ戦うたびに強くなつていく主人公?」

「私やアリサちゃんは違ふと思うけど、なのはちゃんは・・・どうなんだろう?」

すずかは自分の姉の恋人であり、なのはの兄である恭世のことを思い出し、アリシアの言葉を否定しきれないでいた

「アリシア、他の皆も、そろそろ始まるみたいだよ」

他の3人とは違いなのはの極大魔砲を直に受けたのにもかかわらず一番先に目を覚ましたフェイトが映し出された映像を見て他の4人に教える

「悪いな土。俺の都合に巻き込まれて」

「構わん。実のところ、あの決闘を見ていて俺も身体が、血が騒いでいたからな」

「はは、変なところで似てるよな俺達、伐刀騎士つてのは。生まれも、育ちも、使う獲物も違うつていうのに、根本的なところ・・・強者と戦いたいつてところは」

「・・・違うない」

組んでいた腕を解き、土は防護服を展開する

「・・・前から聞きたいことがあったのだが悠一。そのデバイスどこで手に入れた？」

「今更な質問だな。とある奴が作ってくれたもんさ。なのはちゃん達みたいになる物じゃなく、戦闘服を展開するだけの物だ。今となつちや、形見みたいになつちまたけどな」

悠一は首に下げている剣十字のネックレスを指でいじりながら士の問いに答える

「それよりそろそろ始めようぜ。この間は出来なかった、本気の戦いを」

「・・・そうだな」

2人は霊装を展開し構えると、2人の間にカウントが表示されたディスプレイが展開され、カウントが0になると

「はあああああ！」

「おおおおおお！」

2人は地を蹴り、中央でそれぞれの得物を衝突させた

「ぬん！」

「ぐう!？」

開始と同時に衝突し、鏑迫り合いとなったが、勝ったのは士だった。悠一と同等かそれ以上の膂力で大剣を振り抜き、悠一を弾き飛ばす。だが、悠一は空中で体制を整えると、風を集めてジェット噴射のように噴射させて、士の懐に入り込むと、がら空きの腹部に拳を叩きこむが、士は大剣でその拳を防御する。だが子供離れした膂力に噴射の勢いも乗った拳を完全にいなすことができず、吹き飛ばされ、建物から外へと出る。士を追うように悠一も気を操作して空を飛び、士を追いかけた

「天翔閃」

「六の型 〃弧影斬〃」

飛行魔法で体勢を整えた士は大剣を振るい光の斬撃を追ってきた悠一に向け飛ばし、対する悠一も斬撃を飛ばして相殺させ、土に斬りかかる。2人は空中で激しく刀と大剣で斬り結んでいく。その光景を映像を通してみるなのは達は自分たちを超えるハイレベルの戦いに魅入り、映像越しでも伝わってくる2人の気迫に無意識に喉を鳴らす。そして、互いに互いから距離をとって何度目かの鏖迫り合いを解くと、近くにある建造物の頂上に着地する

「さて、ウォーミングアップはここまでにして、そろそろ本気でやろうか」

「そうだな」

悠一の言葉に頷くと士の身体から白銀のオーラが漏れ出す、悠一も同様、蒼いオーラが身体から漏れる。そして、

「おおおおおおお!!」

野獣のように2人が声高々に吼えると、2人から漏れ出していたオーラが一気にはじけ飛び、2人の身体を覆う

「画面越しだというになんて声だ!? 頭が痛くなる」
2人の戦闘を観戦していたクロノが悠一と士の咆哮を聞いて頭を押さえる

「な、なにこれ?」

「どうしたんだエイミイ?」

「土君と悠一君の身体に纏わりついているあの魔力に似た何かなんだけど・・・魔力じゃないみたいなんだよね」

「な、何だと!」

エイミイの言葉にクロノは驚き目を見開く

「間違いないのか?」

「うん。魔力と同等のエネルギーだっということぐらいしか解らない」

「それじゃあ、第2ラウンドと行こか、士！」

「行くぞ、悠一！」

2人は獰猛な笑みを浮かべ、同時に地を蹴り、弾丸、いや砲弾のように突撃する。その際、2人が立っていた建造物は2人の力に耐えきれずに崩れ落ちた。2人は素早く空を飛び回りながら斬り結ぶ。そして、2人の剣速は斬り結ぶたびに上がっていく。そして、何度目かの衝突の際、士は両手で持っていた大剣をいつの間にか片手一本に持ち替えており、空いた手で悠一の服を掴むと

「飛んでいけ！」

思いつ切り投げ飛ばした。投げ飛ばされた悠一は少し離れた建造物ないまで投げ飛ばされる

「つゝゝゝ!?士の野郎、思いつ切り投げ飛ばしやがって」

建造物との衝突の際、背中から思いつ切りぶつかった、悠一は痛む背中をさすりながら起きあがり、すぐさま、外に出ようとしたが、何かを感じ取り天井を見上げると、

「そう来るかよー！」

無数の光の斬撃が建造物を斬り裂きながら降り注いできた。悠一は重力魔法で止めようと考えたが規模は大きいうえに、斬撃はほとんど降り注いでくる。そして、回避を選択した悠一は建物の外めがけて走る。聞こえてくる音を頼りに斬撃と瓦礫の位置を割り出し、躲していくが、さすがにすべてを躲すことはできず、少しずつ傷ついていく

「いなくそ?！」

出口まであと少しといったところで、床が崩れ悠一は体勢を崩す。悠一は八相跳びのようにには近くにあった瓦礫を使って上に上がり、”

虚空”と風による加速を組み合わせ、出口まで一気に跳び、建造物から脱出した

「(間一髪)」

「大地斬！」

「ぐう!?!」

無事に脱出し、安堵している悠一に士は落下の勢いも加えた強烈な剣戟で斬り裂き、海に落とした

「手ごたえを感じなかった。呆れた反射神経だ」

近くの建造物に降り立った士は悠一を斬った際に感じた手ごたえに顔をしかめていると、海中から悠一が飛び出す

「唸れ疾風、轟け雷光、双頭龍」

悠一は風と雷で作り上げた2匹の龍が士に襲い掛かる

「(これは見たことがない伐刀絶技(ノワブルアーツ))」

初めてみる悠一のその技に士は驚くも、瞬時に心を切り替え、迎撃態勢に入る。2匹の龍は意思があるかのような動きで士を襲う

「(ほんの少し掠っただけでこの威力。まともに受けたらただでは済まない)」

ギリギリで龍の突撃を躲した士だったが、服は斬り裂かれ、焼け焦げる

「さすが士だな。初見でこの2匹の猛襲を躲すなんて」

「いったい何なんだその伐刀絶技は？」

「これか？至る前の俺の風か雷、どちらか一つの力しか使えなかった。だが、至ったことよって2つの力を同時に扱うことができるようになったんだ。そのため、同時に使う伐刀絶技を秘密で開発してたんだ。残念ながら披露する機会は無くなったがな。これはその技に重力魔法を加え、さらに自在に操れるようにしている」

「やっかいな技を・・・ぬう!?!」

「ポーっとしてると風の刃で斬り刻まれ、雷撃で痺れ、焼け焦げちま

うぞ」

「俺をなめるな!!天翔裂破」

士は自分の周囲に無数の光の刃を展開し、撃ち放つ。光の刃は襲い来る風と雷の龍を貫き、跡形もなく消滅させた

「〃引天〃」

「なんだ!?!か、身体が!?!」

2匹の龍を打ち消し、反撃に移ろうとした士がだったが、突如、身体が自由が利かなくなり、悠一に引き寄せられる

「伍の型 〃無月一刀・3連〃」

重力魔法のより、自分のほうに向かってくる士に向け、悠一は超高速の居合の3連撃をお見舞いし

「お前も一遍海に入ってこい」

前回転の勢いを利用した踵落としで士を海に蹴り落した

「お早いお帰りで。どうだ?季節前の海に入った気分は?」

「寒いうえに、海水が傷に染みる」

「俺だって同じだったの。さて、そろそろ前と同じように次の一撃で決着をつけるか」

「そうだな・・・異論はない」

悠一の言葉に頷くと士は大剣を構え、エネルギーを纏わせる

「やっぱりそれで来るか。なら俺も・・・この一刀にて、森羅万象、すべての物を断ち切る」

いつもの蜻蛉の構えをとると、太刀にエネルギーが集約し刀身が光り輝く

「奥義・洗鳳剣!」

「肆の型奥義 〃絶刀・天羽々斬〃」

2つの奥義が同時に放たれ、衝突、交差する

「.....」

「今回の勝負は俺の勝ち・・・みたいだな士」

「そのようだな。一つ聞かせてくれあの境地にたどり着いたお前はどこを指す?」

「勿論、その境地のさらに向こうだ。さらに向こうえ プルス・ウル

トラ」。それだけのことだ」

「そうか。なら俺も一層精進しないと・・・い・け・な・い・な」

聞きたいことを聞けた士は保っていた意識を失い、海に落下する。だが、海に落ちる前に悠一の重力魔法で制止し、助けられた

いまさらながらの設定

氷室悠一

容姿 東城刃更

霊装 大太刀型霊装 “天狼”

固有能力 嵐（風＋雷）

防護服 騎士竜戦隊リユウソウジャーのコウに服装（ベストと上着の色を黒に変え、上着はロングコート）

不慮の事故で無くなった青年。お詫びとして数種の特典を貰って2回の異世界転生を行っている。どちらの世界も戦闘系の世界であったことから戦闘能力・技術が異常に高い。3回目の転生であることから今世ではのんびりと過ごしたいと思っている。幼いころから剣道を習っており、腕は全国レベルだった。最初の転生先で闘気（生命エネルギー）を燃焼させて力を上げる闘法を習得した

引いた特典ガチャ（10連）

・ 異世界チート魔術師の西村太一並みの魔力

・ 八葉一刀流の習得

・ 肉体、及び五感の強化

・ 修行を行うことができる異空間

・ 物を収納できる指輪

・ 衛宮士郎並みの家事スキル

・ 好きな英霊を一人だけ召喚可能（未使用）

・ 残りの3つは外れ

異世界で得た新たに得た技能 魔力感知・高速魔力回復・魔力操作
「十変換効率Ⅲ」・複合魔法・錬成・言語理解・生成魔法・重力魔法・
空間魔法・再生魔法・魂魄魔法・昇華魔法・変成魔法

伐刀者ステータス

伐刀者ランク A

攻撃力：A

防御力：B

魔力：A

魔力制御：B＋
身体能力：A
運：A

進藤士

容姿 双星の陰陽師の斑鳩士門

固有霊装 大剣型霊装 “デュランダル”

固有能力 光

戦闘服 スペルビ・スクアール（10年後）の隊服

落第騎士の世界において氷室家に仕えていた家の者で悠一の右腕。悠一との初めての謁見で自分が仕えるべき主がどうか見極めるために勝負を挑み、剣を交え、悠一のことを理解し、生涯の忠誠を誓った。悠一の死後、悠一の妻と子供たちを影で見守り続けた。死後、悠一よりも遅くに亡くなったが、悠一よりも少し前にミッドに転生する。悠一日く、至っていないのに至ったものと同等に戦え、勝利出来ることから、“お前のどこのバグキャラだ”とか

伐刀者ステータス

伐刀者ランク B

攻撃力：A

防御力：B

魔力量：B

魔力制御：B

身体能力：A

運：D

結城明日奈

容姿 SAOのアスナ

戦闘服 ALOの服装

悠一の恋人だった少女の一人。悠一と出会うまでは親の言うままの教育を受けていたが、悠一と出会い、衝突するうちに本来の明るい性格を取り戻し、自分の意思で自分の道を歩くようになった。気づかせてくれた悠一には感謝しており、同時に好意を抱くようになった。悠一が亡くなってからは、親の反対を押し切り喫茶店を開き、繁盛させた。神の計らいにより転生先で悠一との再会を果たす。悠一曰、細いパワーがあるとのこと

神の頼んだ特典

―他人の傷をいやせる能力（俗にいう医療魔法・回復魔法）

―そこそこ多い魔力

―剣術の心得

ラディアント・ライト 愛称 ラディア

待機状態 赤いペンダント

起動状態 長剣（魔弾に出てくるアリファール）

神が明日奈に用意したアームドデバイス。他のアームドデバイス同様、カートリッジシステムを搭載しているが、体がまだ出来上がっていないためその能力は封印されている

雪音クリス

容姿 シンフォギアのクリス（幼少版）

防護服 メガミデバイスの朱羅・弓兵版の服装をベースに上半身に赤いコート、下半身にはハーフスパッツの上に赤いスカート

悠一の幼馴染。日本人の父と日仏系の母親と間に生まれたクォーターの少女。それゆえに幼少時はいじめを受けていたが、悠一が助けていた。このままではだめだと感じ、中学を機に男勝りな口調にかえ

だが本来の優しい性格はそのまま残している。明日奈とは親友兼ライバル。両親の影響か歌が好きで、歌を歌っているときは年相応の表情となる。中高時代は弓道部と音楽部の両方に入っていた

貰った特典

―鷹の目と心眼 (F a t e)

―短距離転移

―そこそこ多い魔力

イチイバル

種類 インテリジエンドデバイス

待機状態 赤いペンダント

アローモード イチイバルの基本形態(見た目はサジツトアポロドラゴンが持つ弓)

エツジモード 双剣形態

バスカ―モード 大剣形態

神がクリスに与えたデバイス。弦を引くと魔力で生成された矢がつかえられる。矢は魔力弾と同じである程度は操作でき、躲されても追尾できる

説明会

「明日奈、おかわり」

「ごっちゃんも頼む」

悠一と士の決闘が終わり、2人に聞きたいことがあった為にアースラの食堂で質問タイムと行こうとした面々だが、現在は目の前の光景に唾然としている

「つたく、いったいどれだけ食べるんだよ？軽く3人前は食ってるぞ」

「しょうが．．ない．．だろう？本気．．で．．やる．．と．．腹が．．減るん．．だ．．よ」

「喰うか、喋るか、どっちかにしろ!!」

食べながら喋る悠一にクリスが注意すると、悠一は食べることに集中することにした。そして、30分ぐらい経過すると

「ぶは〜!!食った、食った。ごちそうさまでした」

「ごちそうさまでした」

「ずず〜。それで、俺達に聞きたいことがあるって言ってたが、何だ？」

食後の緑茶を嗜みながら悠一は集まっている面々に尋ねる

「君たちが本気で戦うといった後に漏れ出したあれはなんだ？」

集まった面々を代表してクロノが2人に尋ねる

「その質問の答えは、放出された俺たちのま．．魔力というのはなしだ、観測していたエイミイがそういつていた」．．ち」

「悠一、ここは素直に言うべきだろう。俺たちの身体から放出されたのは気だ」

『気?』

「気って、あれですか？よく漫画やアニメなどに出てくるあの？」

「ああ。その認識で合ってる」

なのはの問いに悠一が頷く

「リンカーコアだったか？あれとは違い、気は森羅万象、すべての者に宿っている。人は勿論、動物や花や木々、石とかな」

「たいていの者はそれに気づかず終わってしまう。解る物でも、それを引き出すのには厳しい修行が必要だ」

「魔法と同じで身体を強化することも出来るうえ、極めればなのはちゃんの砲撃魔法のように放出することもできるし、炎とか物理エネルギーに変換することも可能だ。まあ、後者に関してはセンスが必要だけだな。だけど使い勝手にいえば、魔力のほうが上かもな、なにせ気は生命力、体力を消費するからな。後先考えずに使ってたらずぐに体力がなくなつて動けなくなるからな」

悠一は闘気の利点と欠点を集まった面々に教える

「質問はこれで終わりか？じゃあ、俺は部屋に戻らせてもらおう」

悠一は大量の食器をうまくプレートに乗せると係の人の渡すと、欠伸をしながら部屋に戻っていく。その途中、

「待て、悠一」

「ん？士？それに明日奈にクリス？どうした？」

「聞きたいことがある。決闘の時は見られていたこともあつて聞けなかつたが。お前の本来の力は嵐のみ、重力魔法はなかつたはずだ。一体どこで覚えた？」

「そのことか。2人も知りたいのか？」

「うん」

「知っておいてそんなねえからな」

「解った。食堂に戻って話すのはあれな内容だからな、俺の部屋で話す」

長年の付き合いから誤魔化すことはできないと理解した悠一は3人に話すことを決めると共に部屋に入り、入ると同時に空間魔法で部屋全体を遮断した

「これは？」

「この部屋全体の空間を遮断した。ないとは思いますが、念には念を入

れて・・・な。さて、何から話すかねえ。まあ、話す前提として士は俺がどんな存在か知ってるか？」

「転生者と呼ばれるものだったか？俺を転生させた老人が言っていた」

「（老人？まさか、爺さん（神）か？聞きたいが連絡手段がないから今度会った時にでも聞かか）そう、その転生者だ。この世界に来る前、俺は第2・・・いや、あの頃のことも含めると第3になるな・・・その第3の生で厄介なことがあったんだ。その世界は伐刀もいなければ魔力などもない普通の世界だった。その世界で普通の青春を謳歌していた時に俺はある者によって異世界に転移された、神を殺せる可能性がある者として」

「神を・・・殺す？」

「俺達を転生させた神とはまた違った神だ。その世界にいる3人の内、1人に呼ばれた俺は神を殺すことになったのさ、すべてが終わったら必ず元の世界に戻すことを条件にな。んで、その2人の神のいるところに行くには、7つの神代魔法と呼ばれる魔法を習得しなくちゃいけないってな、その使い手たちが作った迷宮に挑み、魔法を手に入れ、見事神を殺し、欲しくなかったが『神殺し』の異名を受け取ったのさ」

「ず、ずいぶんと凄い世界に行ってたんだね悠一君」

「機会があれば行ってみたいものだな。亜人族と呼ばれるものにも興味がある」

悠一の話聞き、明日奈は悠一の過去に引きつった笑みを浮かべ、士は興味津々な表情を、機会があれば連れて行くと悠一に言われ、礼を言った

出合いがあり、別れがある

ジュエルシードの事件が解決し、元の日常へと戻った悠一、なのは、アリサ、すずかの4人

「へえ〜〜。じゃあ、フェイト達は一度本局とやらに行くのか」
「はい。故意ではないとしても次元船を攻撃、ロストロギアを集めた件での調書を取るために。でも、回収に協力した事実もあるので重い罪にはならず、せいぜい罰則が付くくらいだってクロノ君が言ってたって、フェイトちゃんと言っていました」

今では名前で呼ぶほどまでに仲良くなつた5人。音声のみの通信しかできないが毎日のように話をしているらしく、その後についてあまり知らなかった悠一になのはが教えていた

「それで、今度の日曜日にも本局に行く前にみんなで会おうって約束をしたんです。悠一さんもどうですか？」

「日曜ねえ……。特に予定は入っていないが……。もしかして明日奈とクリスから伝言を頼まれてないか？」

携帯をいじって予定が入っていないことを確認した悠一は、一種の核心を持ってなのはに尋ねる

「えっと、来なかったら、家まで行って首根っこを掴まえて連れて行くから」って言うっておくように頼まれました」

「家は教えていないんだが、簡単に見つけそうな気がするなあの人なら」

転生者となる前もお気に入りのお場所でのんびりしていると教えてもないのにやってきた2人のことを思い出し、悠一は頭を悩ませていたことを思い出す

「取り合えず、急用が入らない限り行くって伝えておいてくれ」
「解りました」

なのはにフェイト達への伝言を頼むと悠一は仕事に戻っていった

そして、約束の日

「・・・遅い」

「だな」

会う約束をしている公園で会う時間になったのにやってこない悠一に明日奈とクリスは不機嫌さを一切隠すことなく苛立っていた

「2人とも、少し落ち着いて・・・」

「ん？」

「・・・なんでもない」

クロノが2人をなだめようとするが2人の迫力ある笑みにあえなく轟沈した

「明日奈さんとクリスさん、怖いわね」

「う、うん」

「やっぱり、あの2人が最大の敵ね」

アリサとなのはそんな明日奈とクリスを怖がり、アリシアはフェイトの恋敵の強さを冷静に分析する

「(あの2人に勝つにはやっぱりフェイトちゃんと同盟を結んだほうが)」

「・・・」

すずかは明日奈とクリスを見ながら今後のことを考え、フェイトは紙袋を持った状態でそわそわとしていた。すると、クロノのそばの空間に穴が開き

「ふわぁくくく。悪い、遅くなった」

その穴から悠一が欠伸をしながら現れた

『遅い!!』

悠一の姿を見るやいな、明日奈とクリスは怒号を上げながら悠一に襲い掛かるも、悠一は舞い落ちる木の葉のような動きで2人の襲撃を躲す

「随分と遅かったな。来ないものだと思ってたんだが？」

「何、ある物を徹夜で作ってたもんだからな。明日奈、クリス、フェ

イトほれ」

クロノの問いに答えると、悠一は明日奈、クリス、フェイトに小箱を投げ渡す

「なんだよこれ？」

「開ければわかる」

「クリスちゃん、とりあえず開けてみよう？もしびっくり箱だったらお仕置きすればいいんだし」

「それもそうだな」

3人は小箱を開けると中には結晶で作られたアクセサリーが入っていた

「とある一件で大きめの結晶を手に入れてな。その結晶を加工して作った一品だ」

「ユ、ユウイチ、その結晶つてもしかして」

「ああ、暴発したジュエルシードの魔力を吸収してできた結晶だ」

「綺麗」

露店や専門店で販売されているのにも負けないぐらい完成度の高いアクセサリーに見惚れる3人

「後はこれな」

そして、悠一は明日奈とフェイトに携帯に似た端末を渡した

「これって携帯？」

「ただの携帯じゃない。どこにいても通信が可能な端末だ。俺のこいつ（デバイス）は戦闘服を展開できる機能のみだからな、突貫で作った。作成方法は秘密な。使い方は普通の携帯と同じだが、一応取説を渡しておく」

端末についての軽い説明を終えると悠一は2人に扱い方を書いた紙を渡す

「明日奈、クリス、アリシア、フェイト、そろそろ出発の時間だ」

出発の知らせを知らせるアラームが鳴り、クロノが4人にアースラに戻ると伝える。そして、友達のあかしとしてなのはとフェイトはそれぞれのリボンを交換し、アリサとすずかは一緒に選んだりリボンのアリシアに渡し、アリシアは2人に髪留めとヘアバンドを渡す

「そんじゃあ、またな明日奈、クリスマス」

「うん。悠一君も元気で」

「落ち着いたら遊びに行くから、待ってろよ」

「ユ、ユウイチ」

「ん？どうしたフェイト？」

「こ、これ」

「・・・開けてもいいか？」

フェイトの許可を得ると、悠一は紙袋を開け、中に入っていたミサングを取り出した

「明日奈さんに教わって作ってみたんだ。は、初めてだからちよつと、偏って出来ちゃったけど、今までのお礼も兼ねてう、受け取ってください」

「・・・ありがとうな。大切に使うてもらうぜ」

悠一はピンク、黄色、黒、白の4つの刺繍糸で作られたミサングを利腕に着けてフェイトに礼を言う

「元気でなフェイト。落ち着いたら、明日奈達みたいに遊びに来い」

「うん。ユウイチも元気で」

笑顔で別れと再会の言葉を交わすと、フェイトはアリシア達のところに行き、アースラへと戻っていった。こうしてジュエルシードの回収するための戦いは終わりを告げた

八葉対御神 その1

「ありがとうございます」

ここは高町家の敷地内にある道場。その道場で道着に着替えた悠一と美由紀が頭を下げながら礼を言う

「はあく〜今日こそは1本取れると思ったんだけどなく。悠一君、前に手合わせした時よりも強くなってない?」

「そうですね?特にこれといったことはやってな・・・ん?」

「何か思い当たる節でもあるの?」

「いえ、特に何も(久しぶりの土との本気の戦いのお陰だなんていえねえよなく〜)」

心当たりがありまくっていた悠一だったがそのことについて話すわけにもいかず、とりあえず誤魔化すことにして、持参した特製のはちみつレモンをバッグから取り出して飲む

「やってるね」

「お父さん」

「土郎さん」

すると、道場の持ち主である土郎がやってきた。道着き、木刀をもって

「珍しいね、お父さんがここに来るなんて」

「剣を捨て、引退したとはいえ、後進に伝えきるまではさび付かせておくわけにはいかないからね。そうだ!悠一君、僕の訓練がたら、模擬試合をしてみないかい?」

「土郎さんと模擬戦?」

「おお!お父さんと悠一君の試合!恭ちゃんと試合は何度か見たことがあるけど、これは何気に初だね」

「言われてみれば」

美由紀の言う通り、悠一は今まで何度か恭也や美由紀と手合わせを

したことはあったが、士郎とはやったことがなかった。そして、悠一は前に恭也が父、士郎から剣を教わった言っていたのを思い出す

「(恭也さんを鍛え上げた人・・・か。一剣士として興味があるな) お願いします」

「美由紀、立会人を頼む。それと僕たちの試合をよーく見ておくように」

「う、うん」

士郎に言われ、美由紀は2人の間に立つ

「・・・・・・・・」

「・・・・始め!」

それぞれ木刀を構えた悠一と士郎は美由紀の合図で模擬試合を開始した

「(手加減しているとはいえこの速度についてこれる・・・か。恭也が褒めるだけのことはあるということか)」

「(速さは恭也さんより少し劣るけど充分に速い。それに緩急をつけているから少しでも見失えば一気に畳みかけられそうだ)」

道場の中を駆けまわりながら士郎と悠一は剣を交える

「(この年ですでに剣士として完成され、いまだ成長を続ける。いったいどれほどの鍛錬を積んできたんだい、君は?)」

剣を交えながら士郎は悠一の剣士としての力量を図りつつ、悲しい目をするが、その感情を今は抑え、悠一との試合に集中する

「(さすがは恭也さんの剣の師。これだけ打ち合ってるのに隙が全くできない。それに恭也さんと同じ流派で剣士だけど、まったく違うな。恭也さんの剣は若さゆえか少し荒々しいのに対し、士郎さんののは鮮麗されてる。解ってはいたけど、一筋縄ではいかないな)」

「そろそろ温まってきたから少し速度を上げるよ?」

何度目かの交差の時に士郎が悠一に呟くと、速度が上がる

「つく」

上がった速度を乗せた一撃を士郎は悠一に繰り出す、悠一は木刀で士郎の一撃を防ぐも、体格の差から弾き飛ばされるも、宙で体勢を整え、着地する。その瞬間を狙ったように士郎が詰め寄り、今度は臂力を加えた2刀1撃を放つ

「伍の型『残月』」

士郎の2刀1撃を後ろに下がって躲した悠一は抜刀の構えをとり、1歩前に出て木刀を振るう。士郎は2本の木刀を交差させ、挟むような動きで悠一の木刀を抑え込み、滑らせ反撃した

「かはり!」

諸に士郎の2刀1撃を受けた悠一は道場の壁まで吹き飛ばされ、衝突する。痛みに耐えながら起きあがった悠一の首筋に2振りの木刀が添えられる

「……降参です」

形成逆転するのは無理だと判断した悠一は木刀を手放し、両手を上げ負けを認めた

「……しよ、勝負あり。勝者、高町士郎」

ハイレベルな戦いに呆然として美由紀だったが、気を取り直すと腕を上げ勝者の名を告げた

「さすがは恭也さんの剣の師。見事な腕前でした」

「そういう悠一君こそ、その年であそこまでの力量、感服したと同時に、少し悲しくもなったね」

「え?」

「だってそうだろう? 大卒の資格を持っていても君はまだ子供だ。友達を作って、遊んでいたい年頃なのに君は剣にすべてを捧げている。これを悲しいと思わない親はいないよ」

「そんなものですかね」

士郎の話を聞き、悠一は3回も青春を謳歌した手前、どう答えたらいいのか分からずあいまいな言葉と苦笑いで誤魔化した

「だけでもし今度、手合わせをするときは本当の本気の君と戦いたいな」

「っ!？」

自分のにのみ聞こえる声量で言われたことに悠一は眼を見開く

「さて、美由紀。久しぶりに僕が稽古をつけてあげよう」

言いたいことを言うと士郎は美由紀に近寄り、指導を始めた

「・・・あの人にはじいちゃんと同じで一生敵わねえ気がするな」

悠一は自分を鍛え上げた転生先に祖父のことを思い出し、苦笑いすることしかできなかつた

書の日覚め

「万物流転、型は無となり、無は型へと帰る」

言葉による一種の自己暗示を呟くと、悠一は居合の構えの状態で鍛錬用の人形との距離を一瞬で詰め

「残月」

高速の抜刀居合を叩き込むと、続くように

「破甲拳」

掌底を繰り出し、人形を弾き飛ばす。そして、

「疾風」

素早い動きで弾き飛ばした人形を追い、斬り抜ける

「破斬」

追撃の斬撃を叩き込み、斬り抜ける

「断空」

そして、振り向きざまに渾身の力を込めた一撃を繰り出し、返す形で

「螺旋」

回転の力を乗せた切り上げを繰り出し

「飛燕」

再び返す形で太刀を振るい、斬撃を飛ばし

「無・・!?!」

とどめの一撃を放とうとしたところで悠一は動きを止めてしまった

「くそ、身体が出来上がってない今の状態じゃ、やっぱり無理……か。むしろ、七つまでよく持ったほうだ」

悠一は霊装の展開を解き、大の字になって床に倒れる

「はあ~~~~やっぱり、子供の身体は色々と不便だよな~~~~。今まで普通にできていた動きに体が付いていけないんだからな~~~~」

ある程度休むと悠一は魔力操作で動かしていた人形を元の場所に戻し、服を着替え滝行を始めた。本来滝行とは煩惱を断つために行うためだが、悠一はそれと同時に足腰も鍛えられるように定期的に行っている。そのため、この滝は落ちてくる水の量を調整することができるのだ（落ちてくる水の勢いは最大で毎分1万ℓ）

「くあ~~~~~！いい運動したぜ」

修行空間から戻ってきた悠一はリビングにやってくるが、そこにはだれもいなかった

「はやては、まだ帰ってきてないみたいだな」

悠一は時刻を確認すると、夕方の4時を針が差していた

「……今日は俺が作るか。何があるかな~~~~？」

「……遅い」

針が7時を指したころ悠一はいまだに帰ってこないはやてを心配し始める

「さつき病院に電話して、診察は終わって病院からは出たって言うことは聞いた。まさか帰りの途中で何かあったのか？……使うか」

悠一は指にはめている指輪型の宝物庫からフクロウの形をした機械を数機取り出し、窓を開けて外へと飛ばす。そして、パソコンを立ち上げ、インストールしたアプリを起動すると、今飛ばしたフクロウが見ている映像がパソコンに映しだされる

騎士達との語り

『ここは・・・一体?』

『目が覚めたようだね。いきなりびっくりしたよ、主と散歩をしていたら、空から傷だらけの君が落ちてきたのを見たときは』

『ころころ!!まだ傷が完全に塞がってないのに動いちやだめでしょう!?!』

『つく、また私の負け・・・か』

『そう悲観することはないぜ?体格や臂力の差があるとはいえ、俺に傷をつけた女剣士はお前で3人目だ。鍛錬を続ければあの人に届くかもな』

『ほれほれ』

『な、なにしゃがる悠一!?!』

『ん?何って肩車?』

『それってお前が前話してくれた、大人が子供にする奴だよな・・・つて、あたしは子供じゃねえ!?!』

『そうカツカするな。ほれ、俺、特性のクッキーだ。これをやるから機嫌を直せって』

『ふん!』

『はあ!』

『剣もそうだが、拳のほうもなかなかやるな』

『拳を主体としている奴らに比べれば俺のはまだまだだ』

「……まさか、この時代であいつらと再び出会うことになるなんてな」

悠一は夜空の星々を見上げながら昔のことを思い出していた

「おい」

「ん？」

「話がある……ついて来い」

「……解った」

話しかけてきた少女の言葉に頷き、悠一は少女と一緒に1階へと降りて行った

「まずは、気を失ったはやてを連れてきてくれたことにお礼を言わせていただきます。本当にありがとうございますございました」

話をするためにリビングに集まった悠一は2人の女性、1人の少女、獣耳を生やした男性に頭を下げて礼を言う

「さて……一般人としての話はここまでにしよう。久しぶり……になるのか？俺が誰なのか分かってるって顔だな」

「当然だ。見た目こそ変われど、雰囲気、覇気は変わっていない。主のほかに私が忠誠を誓った氷室悠一のものと同じだ」

「忠誠って相変わらずだなシグナム」

桃髪の女性、〃烈火の将〃の異名を持つシグナムのもの言いに悠一は苦笑いする

「シグナムの場合、それだけじゃないのよね〜」

「シャ、シヤマル!？」

「うふふ、久しぶりね悠一君。大けがをしてるのに動く悠一君を怒っていた時が少し昔のような気がするわ」

〃湖の騎士〃の異名をもつ女性、シヤマルが笑みを浮かべながら再会を懐かしむ

「……」

「何だよヴィータ。しきりに自分と俺の身長を比べるなんて」

「……アタシのほうが少し小さいっか。もう少し低ければ今度はあ
たしが悠一を子ども扱いできたのによ〜」

「そんなことを考えていたのかお前は」

『鉄槌の騎士』の異名を持つ少女、ヴィータの発言に悠一はシグナ
ムの時同様、あきれる

「ザフィーラも久しぶりだな」

「うむ、お前も爽快そうだなによりだ」

『盾の守護獣』の異名を持ち男性、ザフィーラは無表情のまま答え
るが付き合いの長い者は嬉しそうにしているのが分かった

「しかし、まさかはやてが夜天の書の主だったなんてな。これもま
た巡りあわせてやつか？そういうえはもう一人のあいつはどうした
んだ？」

悠一はここにいない5人目の騎士についてシグナム達に尋ねる

「あいつはその本の中で眠ってるよ。その本のページが全部埋まっ
て、本が完成すれば出てくるようになってる。なんでかは知らないけ
どな」

「そうか。だけど、俺が知ってる夜天の書に転生機能なんてものは
なかったはずだったが？」

「悠一がいなくなった後に主が入れたのだ。権力者の手に渡るぐら
いならばって言った」

「あいつらしいな」

「主の形見と言えるものがあるとしたらこれぐらいだろう。闇の
書、あれを」

『……』

悠一が夜天、シグナムが闇と呼んだ魔導書がひとりでに開き、本の
中からボロボロになったペンダントが排出され、テーブルの上に置か
れた

「これは魔導書と一緒にあいつが使っていた、トリニティ・アーク
」か。随分とボロボロだな。だがあいつの腕なら数時間もあれば直

せるレベルだ。なんで直してないんだ？」

「解んねえ。あいつはこれを直すなんてことはしなかった。あたし達にも来るべき時まで決して直すなって」

「来るべき時ねえ（何を考えてたんだあいつは）。閉まっていいぞ」
悠一はペンダントを手に取って少しいじった後、魔導書に収納していいというが、魔導書は一向にペンダントを収納しない。むしろ

「持っている、そういうことか？」

『……………』

「解った」

返答の代わりに開かれたページに文字化描かれ、悠一はペンダントを宝物庫ではなくポケットにしまった

「さて、話も終えたことだし。少し遅くなったが飯にするか」

悠一は冷めた料理を温めるために席から立ち上がり、温め、数百年ぶりに再開した友の騎士達と一緒に昔のことを話しながら食事をとった

騎士たちの今と、昔話

「ギガうめえくく!!」

「せやろ、ここ（翠屋）のシユークリームは絶品なんよ」

シグナム、シャマル、ヴィータ、ザフィーラの4人との邂逅から数日。目覚めたときに知らない者達があり、魔法というおとぎ話に出てくる力を自分が持っているとか聞かされたはやては驚いていたが、4人の主として衣食住の面倒を見ないといけないという、オカンの発想に至り、4人を武器、道具としてではなく新しく出来た家族として4人と接している。最初こそ戸惑ったシグナム達だったが、はやての人の柄のおかげか今ではどこにでもいる家族と大差ないぐらいの関係となっている

「ここのお代はユウ君が払ってくれるから、いっぱい食べてええから・・・うきや!」

「誰が?何を?払うって?」

会話を聞いていた悠一がアイアンクローをはやてにかけながら笑顔で尋ねる

「2個までなら払ってやる。それ以上ははやてに払ってもらえ。それと、土産としてシグナム達にもちゃんと買って行けよ」

「お、おう」

はやてにかけていたアイアンクローを解き、ヴィータに要件を伝えると悠一は仕事へと戻っていった

「にやははは、ヴィータちゃんでも悠一お兄ちゃんには逆らえないんだね」

「うるせえぞ、高町なんか」

「だから、なのはだっばく!!」

相席していたなのはの言葉にヴィータが八つ当たりする

「(最初は険悪だったが、仲良くなってくれてなによりだ)」

なのはとヴィータにやり取りを横目で見ながら悠一は笑みを浮かべながら、最初に会った時のことを思い出す。はやてが悠一の働いているシグナム達に見せようと翠屋に来た時、休日だったため店の手伝いをしていたなのはとその手伝いをしていたアリサ、すずかとの出会い、全員一目で魔導士なのだと気づいた。はやての友人だということに警戒しながらも話をしてきた6人と1匹だったが、念話での会話でなのはが漏らした管理局を鉄だったことがあると聞いて、シグナム達の警戒がMAXになり一戦始まるかと思ったが、はやてに念話での会話をはやてに聞かれ、説教、詳しい話を聞き、なのは達が管理局に属していないことに気づき、謝ったがヴィータは警戒を解かず、それを見かねた悠一が「騎士ならそいつが自分達の中で味方になるのか敵になるのか、戦って判断しろ」と言われ、戦い、信用に足る人物だと感じたそうだと

「ヴィータちゃん、表に出るの！勝ったら私の名前をちゃんと覚えて、呼んで貰うからね！」

「っは！返り討ちにしてやるぜ」

「2人ともけがさえへんでな〜」

ほほを膨らませたなのはと余裕の笑みを浮かべたヴィータが店から出ていくのをはやてが笑み浮かべながら見送る

「ただいま〜」

「今戻った」

「戻ったぜ〜」

なのはとの一悶着合ったものの、はやてとヴィータは悠一のアルバイトが終わるまで翠屋にとどまり、仕事が終わると共に家に戻ってき

た

「はやてちゃん、ヴィータちゃん、悠一君お帰りなさい」

3人が家に入るとエプロンをつけたシャマルが出迎える

「ただいまシャマル。シグナムはまだ帰つとらんのか？」

「はい。また近所の剣道場に行っています。多分そろそろ帰つてく
ると思いますよ」

「ほな、このシユークリームは食後のデザートにしよか」

「はやて、晩飯の時間になるまで少し寝てる。出来たら教えてくれ」

「はいな〜」

そういうと悠一は2階に上がり、部屋に入ると鍵をして

「開錠」

異空間にある訓練場へと足を運び、日課の訓練を始めた

「「「「ごちそうさまでした」」」」

「はい、お粗末様でした」

剣道場に行っていたシグナムが帰ってき、今日あったことを話しながら夕食を食べ、お土産に買ってきた翠屋特製のシユークリームを食べ終わると、各々好きなことをして過ごし始めた

「こうしていると最初の主と共に過ごしていたことを思い出す」

「そうね」

「そうだな」

「うむ」

「最初の主。この闇の書を作った人やよね？どんな人やったんや
？」

シグナム達の話の話を聞いていたはやてが気になったのか尋ねる

「そうですね、主はやてと同じように我らのことを道具としてではなく家族として扱ってくれていました」

「あの時代は今と比べると平和とはほど遠いところだったけど幸せ
だったわ」

「戦乱が終わったなら一緒に世界を見て回ろうって約束したけど、結局その約束を果たすことができなかつたのがあたし達の心残りだな」

「・・・ほんなら、その世界を見て回ろうっていう約束は私らで果たそう」

「主」

「いつになるかわからんけど、私の足が完治したら、皆で世界を見て回ろう」

笑顔で言うはやてにシグナム達はあつけにとられたが、笑みを浮かべて頷いた

剣聖対烈火の将、数百年ぶりの手合わせ

「ほえ〜〜〜」

「面積46ha、デイズニーランドと同じぐらいの広さを持つ空間だ」

はやては島ほどの大きさを持つ空間を持っていることに驚愕する

「山もあるし、少し行った先には海もあるからちよつとしたバカンスも出来る。まあ、俺は主に修行用に使ってるけどな」

何故、悠一がはやてと守護騎士達を連れて修行用の空間に来ているのかというと、話を30分ほど前にさかのぼる

「悠一、久しぶりに一手交えないか？」

その日は翠屋でのバイトが休みで何をして1日を過ごそうかと食後のお茶を飲みながら思索しているとシグナムが声をかけてきた

「そう・・だな。久しぶりにシグナムと戦うのもありだな」

「決まりだな。場所はどうする？」

「俺の修行空間でいいだろう。あそこならどれだけ派手に暴れても問題ないからな」

「では、私はシヤマルに声をかけてくる」

そういうとシグナムは2階にいるシヤマルの下へと向かった

「今、シグナムが楽しそうに2階に上がっていったみたいやけど」

「久しぶりに悠一と手合わせ出来るから高揚してるだけだ」

「何でユウ君と手合わせするだけで高揚するんや？」

「そりゃあ、悠一はあたしらと同じで騎士だからな」

はやての問いにヴィータが答えると

「つというとなにか？ユウ君は私と同じで魔導士？ってこと？」

「そうだぜってはやて、知らなかったのかよ？」

「初耳や」

ヴィータから告げられた驚愕に事実にはやては目を点にし、悠一を見る

「教えて面倒ごとには巻き込ませたくはなかったからな、教えなかっただけだ」

「ユウ君、シグナムとの手合わせ、見てもええかな？魔導士同士の戦いを見てみたいんや」

「俺は別に構わないが、俺もシグナムも接近戦をメインにしてるからはやてが想像しているようなイメージにはならないと思うぞ？」

「それでも見てみたいんや」

「・・・解った。取り合えず、着替えを準備してこい」

「何で着替えが必要なんか解らへんけど、了解や」

はやては悠一の話聞いて不思議に思いながらも言われた通り、着替えを取りに行った。そして、冒頭に戻る

「悠一、さっそく始めよう」

シグナムは体が疼いているのか早く戦おうと悠一をせかす

「はいはい」

そんなシグナムに悠一は苦笑いしながら、戦闘装束を展開し、気を操り空に浮かび上がる

「レヴァンティン」

『Ja』

シグナムも愛剣である炎の魔剣“レヴァンティン”を展開し、騎士装束を纏うと悠一を追うように空へと飛びあがった

「それが新しい騎士装束か？」

「ああ。主はやてが考えてくれたものだ」

「ベルカ時代の装束よりもいいな。似合ってるぞ」

悠一はシグナムの騎士装束を見て、正直な感想を言う

「そ、そうか」

悠一に褒められ、シグナムは頬を少し赤く染めると数回深呼吸して心を落ち着かせ、剣を鞘から引き抜く

「来い『天狼』」

悠一が言葉を紡ぐと暴風と放電が起こり、それが収まると鞘に収まった大太刀が左手に握られていた。悠一は鞘を腰の剣帯に納め、大太刀を抜刀する

「ルールはあの時と同じか？」

「ああ。有効打、及び一滴でも血を流したほうの負けだ」

「解った。(シヤマル戦闘開始の合図を頼む)」

『解ったわ』

シグナムが念話でシヤマルに頼むと、遠くのほうから緑色の魔力球が空に向かって放たれる

「……」

2人は無言で大太刀と剣を構える。そして、魔力球が一定の高さまで上昇すると、弾け

「参る」

「勝負！」

その音を聞くと2人は数百年ぶりの手合わせを始めた

「はああああ！」

「でえいいい！」

悠一とシグナムの手合わせが始まって数分、一進一退の攻防が続いていた。シグナムが剣を振るえば悠一が太刀でその一閃を受けながら、悠一が太刀を振るえばシグナムは剣でその一閃を受け止める

「雷神剣」

何度目かの交差を行うと、大太刀による接近戦を行っていたが悠一は宙に雷撃でできた剣を複数生成し、シグナムめがけて撃ち放つ

「レヴァンティーン！」

『Schlangenform』

それを見たシグナムは剣を連結刃に変化させ、振るう。振るわれた刃は円の動きをしながら放たれた魔力剣を次々と砕き、全てを砕き終えるとその牙は悠一へと襲い掛かる

「(いつも思うがあれはどこまで伸びるんだ) 硬気功」

悠一は体内の気を操作して肉体を硬質化させると連結刃の刃を掴み取り、動きを封じた

「今の俺の身体の硬度は鋼以上だ。この程度じゃ、傷一つつかねえよ！」

そして掴んだ連結刃を力任せに引っ張り、シグナムを自分のほうに引き寄せ、蹴りを放つ

「つぐ!?!」

有効打となるはずだった悠一の蹴りだったが、シグナムはギリギリのところで鞘を使って悠一の蹴りを防ぎ、有効打に至らずに済んだ。シグナムは連結刃を元の剣に戻し、剣の柄頭と鞘を合わせる

「まさか、アレを使うつもりなのシグナム!?!」

「なあ、ヴィータ?なんでシャマルはあそこまで慌てるんや?」

映し出される映像を見て慌てるシャマルを不思議がりながらはやては隣で観戦しているヴィータに尋ねる

「まあ、アレの威力を知ってる身としては慌てるよな。今からシグナムが撃つ魔法はシグナムの持つ中で一番の破壊力を持つんだ」

「もしかしてユウ君、危ない状況?だからシャマルが慌てとるん?」

「そういうこと」

『Bogenform』

剣と鞘が一体となり長弓へと変わり、矢が手元に現れ、魔力でできた糸で弓を引くと、矢先に魔力が集まり、炎をともし

「翔けよ、隼！」

『Strurmfalken』

前例と追っても過言ではない矢が放たれる。矢に灯っていた炎は放たれたと同時にまるで鳥のような形となった

「……」

命中すればただでは済まない攻撃を前に普通ならば回避という選択をとるのが普通なのだが、悠一は回避ではなく迎撃するという選択を選んだ。悠一は大太刀を鞘に納め、呼吸を整える。そして矢が自身の迎撃できる範囲に入ったことを感じ取ると

「肆の型『断空』」

大太刀を抜刀する。すると、矢は4つに別れ、悠一の通り過ぎ爆発した

「……」

「肆の型は『斬る』ということに重点を置いた型。極めれば、岩や鋼鉄は勿論、目に見えない物も斬ることができる。魔法だって例外じゃねえ」

あり得ないといった表情をしているシグナムに悠一は大太刀を納めながら話す

「お前との付き合いはそこまで長くないが、改めて規格外な男だということ改めて思い知らされた」

「俺に限界って文字はないからな。んでどうする？最大の技みたいだったか？まだ続けるか？」

「無論だ」

悠一と話している間に新たなカートリッジを装填しなおしたシグナムは生き生きとした笑顔で即答する

「最大の技を出したんだ、敬意を払い俺も奥義を使わせてもらう」

そういうと、悠一は瞳を閉じて精神統一を行う

「無念無想、我が太刀は無」

統一と自身への自己暗示を終えると悠一は生み出した無数の残像

と共にシグナムへと向かう

「（これはまずい！）レヴァン・・・」

「遅い」

生み出された数にシグナムは反撃を行おうと試みたが、それよりも早く悠一とその残像が全方位からシグナムに斬りかかる

「無の太刀・絶葉」

悠一と残像が一つのなり、太刀を納刀すると、剣風が生み出され、シグナムの騎士甲冑を斬り裂き、肉体に傷をつけた

「・・・俺の勝ち・・・だな」

斬られた騎士甲冑の隙間からシグナムが血を流していることを目にした悠一は大太刀を納めながらそういう

「そのようだな」

斬られた騎士甲冑を修復しながらシグナムが剣を納める

「す、すごい戦いやったわ」

映像越しとはいえ、一流魔導士の戦いを見たはやては興奮していた

「私もいつか2人みたいに戦える?」

「近接戦闘っていう意味じゃはやてには無理だと思う」

「うん、2人に動きを見て私には絶対に出て来へんって思ったわ」

ヴィータの返答にははやては肯定した。そして、手合わせを終え、はやて達のところに戻ってきたシグナムはシャマルに小言を言われながら傷の手当てをされ、それを終えると全員で空間内にある露天風呂（全員水着着用）に入り、疲れをとった後、悠一とシグナムが手合わせをしている間に海に行っていたザフィーラが捕ってきた新鮮な海の幸でちよつと豪勢な夕食を食べた

再会と新たな波乱の幕開け

「う〜う〜寒くなってきたな〜」

口から漏れる白い吐息と冷気をその身に受けながら悠一は冬になつたのだと実感する

「えっと、頼まれた物は・・・ん、全部買ったな」

悠一は桃子に頼まれた買い物リストに目を通し、買い忘れないかを確認すると店へと戻る

「ただいま戻りました〜」

「あら、お帰りなさい悠一君」

「桃子さん、頼まれた物です」

「ありがとうございます。ごめんね、本当なら私が行かなくちゃいけなかったんだけど、手が離せなかつたら」

「気にしないでください。これも仕事の内ですから」

買った物と領収書を桃子に渡し、仕事に戻ろうとすると

「悠一君、これ」

士郎が悠一にカフェオレを差し出す

「買い物を代わりに行ってきてくれたお礼だよ。はやてちゃんも来ているから、一息入れてきなさい」

「・・・じゃあ、お言葉に甘えて」

悠一は士郎の提案を受け入れ、差し出されたカフェオレをもって、はやての座っている席に行き、一声かけると、座って、カフェオレを飲む

「私が来たときいなかったけど、何処かに行ってたんか？」

「桃子さんに頼まれて、買い出しに行ってきたんだ。・・・やっぱり今日もヴィータは来てないんだな？」

「うん。何でも近所のお爺ちゃん、お婆ちゃんと会う約束をしてるって言ってたわ」

「そうか」

何でもないように話してはいるが少し寂しそうな口調で話すのを悠一は聞き逃さなかった

「(つたく、主を守る騎士が主を悲しませるだなんて本末転倒だな)」
実際は悠一は4人が自分たちに隠れて何かを行っていることに気づいていた。そして、気づいたからこそ何をしているのか、問いただそうとしたが、4人の目を見て聞くに聞けなかった

「何も起きなきやいいんだけどな」

「ん？」

「いや、何でもない」

「ただいま〜」

はやての問いに答えると店の扉が開き、なのはが入ってきた

「お帰りなのはちや・・・っへ？」

席が近かったため悠一がなのはを出迎えて。そして、なのはの後ろにいる人物たちを見て啞然とする

「久しぶりだねユウイチ」

「おっひさ〜ユウ！元気にしてた？」

「へえ〜結構様になってるな」

「ふふ、そうだね」

「フェイト、アリシア、明日奈にクリス!?!なんでここ(地球)にいるんだ!?!」

フェイト、アリシア、明日奈、クリスの再開に悠一は啞然とする

「何でって、今日からここ(地球)で暮らすからに決まってるじゃん」

「はあ!?!」

アリシアの言葉に悠一は驚き、声を上げる

「どうしたの悠一君?そんな大声だし・・・あら?なのは帰ってきてたの?」

「うん。今帰ってきたところだよ。それよりお母さん、紹介するね。なのはの新しいお友達の・・・」

「初めましてアリシア・テストロッサです」

「妹のフェイト・テストロッサです」

「結城明日奈です」

「雪音クリスです」

なのはは桃子にフェイト、アリシア、明日奈、クリスの4人を紹介する。そして、なのはははやてにもフェイト達を紹介するとそのまま雑談を始める、主に自分のことに関する話だったため、悠一はいたたまれずそそくさとその場から去り、仕事に戻った

そして、そのころ

「ええ。彼女たち以外の4つの巨大な魔力が地球に来たのを感じたわ。転移で来たことから000とかかわりがあるかもしれないけど・・・解ってるわ。1日でも早く魔導書のページを埋めて、はやてちゃんを救うために」

シャマルは探知魔法でフェイト達の魔力を探知しており、空に向かって話しかけていた

「さっきの場所が買い物するのにおすすめなところだ」

「ありがとう悠一君。なのはちゃんも付き合ってくれてありがとう」

バイトが終わった悠一は明日奈達に街を案内してくれて頼まれ、はやてを家に送ったあと、案内がてらおすすめのお店等を教えていた

「え？プレシアさんとリニスさんはまだこっちに来てないの？」

「うん。でも、2, 3日の間にはこっち（地球）に来る予定だよ」

「必要な荷物はもう家に運び終えたけど、予想外に時の庭園の改修に時間がかかっちゃってるんだよね〜」

「でかい家つてのも考え物だな」

「予定よりかなり遅くなった。家まで送ってい・・・」

なのは達を家まで送ろうと悠一が言おうとしたとき、
結界が街を覆った

「……なんで悠一とあの女がターゲットの4人と一緒にいるんだよ」

高層ビルの屋上でサーチャーから送られてくる映像を見て少女、
ヴィータは軽く舌打ちをする

「(多分、私たちが現われる前に知り合っていた子達ってことね)」

「(っー)ことはこの4人は管理局と関係があるってことか。今、あの4人を襲えば悠一にあたしらがやってることがばれるぞ?」

「(……おそらく悠一は我らが何かをやっていることを知っているはずだ)」

「(あの4人の少女から魔力を蒐集する。シャマル、結界を張ると同時に氷室と高町の2人を転移魔法で結界から飛ばせ。飛ばした後、結界に入ろうとするなら可能な限り足止めを)」

「(解ったわ。それじゃ、行くわよ)」

シグナムの言葉に頷くとシャマルは結界を張った

「これって……」

「結界だな」

なのはの言葉に続くようにクリスが語る

「でも、どうして結界が……まさか、近頃起きている魔導士襲撃事件と何か関係が」

「んっ」

全員が辺りを警戒していると、悠一となのはの足元に見覚えのある魔方阵が展開される

「っ、これって」

「おいおい、まじかよ」

なのはと悠一が驚く中、2人は光に包まれ強制的にその場から跳ばされた

「きゃああ?」

強制的に結界内から飛ばされたのははすぐに戻って、フェイト達の援護をしようと動いたとき、魔力で生成された翠色の糸に拘束され、動くことができなくなった

「これは一体どういうことだ・・・シヤマル、ザフィーラ」

なのはと違い糸に拘束されなかった悠一はなのはを縛っている糸の出所に視線を移し、騎士装束を纏っているシヤマルと、大狼形態のザフィーラに尋ねる

「・・・やっぱり、ばれちゃいましたか」

「ここ(地球)でベルカ式の魔法を使うのはお前達だけだ。さて、もう一度聞くぞ?これはどういうことだ?」

怒気を含んだ声色で悠一はもう一度2人に尋ねる

「はやての命・・・ではないな。出会ったばかりのあの4人を襲えなんて言う命令、あいつは絶対にしない」

「・・・」

「だんまりか・・・取り合えず、きつめの仕置きをしてからゆつくりと聞かせてもらおう」

「テオオオオ!!」

悠一が一步足を踏み出した瞬間、ザフィーラが遠吠えを上げると同時に地面から魔力でできた無数の釘が壁のように悠一となのはの間に突き出た

「(シヤマル、お前は高町の拘束を続ける。悠一の相手は俺がする)」

「・・・解ったわ」

シヤマルとの念話を終えるとザフィーラは人型へと姿を変える

「『盾の守護獣』の名に懸けて、ここから先へは行かせん」

「もう一体何なのさ——!?!」

「文句を言ってる暇があるならあのガキを打ち落とすことに集中しろ！」

一方結界内では、クリス、アリシアのコンビ対ヴィータ。フェイト、明日奈対シグナムの戦いが繰り広げられていた

「聞こえてるぞ！誰がガキだ!!」

「うひゃ!?!」

「ちい」

クリスの言葉が聞こえたのかヴィータは怒鳴りながら2人めがけて小さな鉄球を打ち飛ばし、2人がそれをギリギリのところまで躲した

「この」

「くらえ」

アリシアとクリスは2丁銃と弓から魔力弾をヴィータに向けて放つ

「しやらくせえ!!」

ヴィータはその見た目からは想像できないほどの力で槌を振るい、2人の放った魔力弾を打ち消した

「ワア~~~~オ」

「なんてパワーだ(アリシア、あのガキを打ち落とすために魔力砲を撃つ。チャージまでの数秒、頼めるか?)」

「(出来るかどうかわからないけど、頑張る)」

「(済まないな。出来るだけ急ぐ、頼んだぞ)」

「了解！」

念話を終わると逃げることに専念していたアリシアが魔力弾を撃ちながらヴィータに近づく

「ようやくその気になったかよ。でも、おせえ!!」

ヴィータはさつきと同じように槌を振るって魔力弾を打ち消すと槌を構えてアリシアに突撃し、槌を振るう。アリシアは一步後ろに下がってヴィータの攻撃をかわすと、片方の銃を片手剣に変形させ、振るう。だが、歴戦の戦士であるヴィータはその攻撃を防御魔法で受け止めた。アリシアは深追いすることなく後退しながら魔力弾を撃つも、ヴィータの防御魔法を突破することはかなわなかった

「っは！そんな鈍ら弾なんて効かねえ！」

防御魔法を解くとヴィータは槌を構えて後退するアリシアを追いかけたところで動けなくなってしまうた

「バインド!?いつの間に」

「私みたいに、装甲は薄く、攻撃力も低いタイプは常に相手の先を見ないといけないからね〜（クリスは・・・もう少しかかりそうだね。少しでも勝てる確率を上げるために、ダメージを与えておこう）」

横目でクリスの現状を確かめたアリシアは魔力弾を撃ちながらヴィータに突撃し、

「雷鳴斬り！」

帯電した片手剣を振り下ろし、ヴィータに斬撃と電気によるダメージを与える

「ん、この」

「うわ〜、今のコンボを受けて、まだ意識があるなんて。でも、次で終わりだよ」

「どういう意味・・・っ!？」

連続攻撃を受けてなお、意識があるヴィータにアリシアは驚くが、意味深い言葉を残して空域から離脱する。問いたださそうとしたヴィータは遠くのビルの屋上で自分に狙いを定めているクリスを見つ、アリシアの言葉の意味を理解した

「チャージ完了・・・くらえ、グリントアロー！」

魔力の充填を終えたクリスはバインドで身動きのできないヴィータめがけて魔力砲を放た

「ちい!？」

砲撃に込められた魔力量と弾速をみて、ヴィータは強引にバインドを破壊してからの回避行動では間に合わないと察し、防御魔法を張って砲撃を逸らすこととした

「ぐう!？」

押し込まれそうになりながらもヴィータはその場で踏ん張り、砲撃をそらすことに成功したのだが、少しだけ掠ってしまい、少し焼けてしまった帽子が落ちて行った

「・・・あ」

落ちていく帽子みて、ヴィータは帽子に装飾されているうさぎが少し焦げてしまっていた

「・・・・・・」

ヴィータは無言でバインドを壊すと、アリシアとクリスを睨みつける

「ぶっ潰す!!」

怒りの表情で2人に再び襲い掛かった

「はあ、はあ」

「(2人ともいい動きをする。よほどいい師に巡り合い、鍛え上げられたのだな)」

一方、フェイト、明日奈の2人もシグナム相手に苦戦を強いられていた

「(この人・・・強い!)」

「(2対1だっていうのに、有効打を与えられない)」

「(明日奈、私が攪乱する。隙を見つけたらお願い)」

「(解ったわ)」

バラバラに戦っているのは絶対に勝てないと察したフェイト達は数の利とコンビネーションで戦うことを決めた

「はあああああー!」

フェイトは愛機を戦斧から大鎌に変形させると、ヒット&アウェイを行いつつ、シグナムの周囲を目まぐるしく動きながら、隙を作り出そうとする

「確かに速い。だが、あいつの動きに比べればまだ目で追える」
シグナムの目はフェイトを捉えており、時折来る攻撃も難なく防いでいる

「(ヴェータも決めに入ったか。こちらも終らせるか)」
遠くでヴェータの魔力が爆発的に上昇したのを感じたシグナムは自分も2人との戦いに決着をつけようと決める。今まで防いでいたフェイトの攻撃を身体を半歩ずらして躲し、無防備なフェイトに向け、攻撃しようとした瞬間

「はあああああー！」
一瞬のスキを狙っていた明日奈が高速移動魔法を使ってシグナムとの間合いを瞬時に詰めると長剣で突きを行うが、その突きは空を切った

「・・・え？」
確実に当たると思っていた攻撃が空振り、明日奈とフェイトは呆ける。そんな一瞬のスキを見逃すシグナムではなく

「紫電十字閃！」
炎を灯した剣と魔力で強化した鞘で十字を描くよう振るい、打撃、斬撃、炎熱、3つの力が一体となした一撃を繰り出し、フェイト明日奈の2人を戦闘不能にした

『シグナム、こっちは終わった。そっちはどうだ？』
「こちらも今終わった。魔力の蒐集は？」
『もうすぐ終わる。これでかなりページが埋まるはずだ』
「なら終わり次第、本をこっちに。想定より時間がかかったからな』

『わか・・・』
ヴェータとの念話が終わろうとした瞬間、張られていた結界に亀裂が入る

「・・・まさか」
自分たち守護騎士の中でサポート能力随一のシャマルが張った結

界に罅が入る。過去にも一度だけ同じことが起きたことを思い出し、シグナムが冷や汗を流すと、亀裂の入った個所が砕け、何かが弾丸のごとき速さでビルと衝突し、崩壊させた

「・・・さすがはザフィーラ、『盾の守護獣』と呼ばれるだけはあるたぜ。近接格闘ではやっぱりあいつのほうが上だったな」

背後から聞こえてきた声にシグナムは身体を振るわ、恐る恐る振り返ると、少しボロボロになった防護服を纏っている悠一が浮いていた。「さて、ザフィーラにも言ったがお仕置きタイムだ」

襲撃・2

「ぐううう!?!」

「ザファイーラ!?!」

結界を突き破り、高層ビルと激突したザファイーラは頭を軽く揺らし、眩暈を振り払っている。慌てた表情をしたヴィータが近寄ってきた

「誰にやられた・・・って聞くまでもねえか」

「油断をするなヴィータ。おそらく、いや、確実に悠一はこの結界内に入っている」

「だろうな。襲撃した4人の内、2人からは魔力を蒐集した。シグナムと合流して、撤退・・・」

「つむ!?!」

ヴィータとの話の途中、何かを感じ取ったザファイーラは身構え、飛来してきた何かを受け止めた

「ぬううううう!?!」

あまりのパワーにザファイーラは後ずさりするが何とか踏ん張ることに成功した

「大丈夫かシグナム?」

「・・・すまないザファイーラ、助かった」

飛来してきたシグナムは受け止めてくれたザファイーラに礼を言う

「悠一の様子はどうかだったんだシグナム?」

「・・・怒気を外には出さず、内に秘めていた。完全に怒りをコントロールしている」

「自滅は狙えないってことか」

「3人纏まっているのか、手間が省ける」

「ヴィータとザファイーラがいるのを解って私をここに投げ飛ばしておいてよくいう」

空間に穴が開き、その穴から出てきた悠一が3人纏まっていること

に笑みを浮かべる

「こい、天狼」

悠一は鞘付きの大太刀を顕現させ、鞘から抜く。そして、サッカーボール並みの雷球を作り、上に放り投げる

「雷よ我が矛となり盾となれ」

悠一が呟くと、放り投げられた雷球が弾け、悠一へと落ちる。水や霧を振り払うように腕を振るうと光が弾ける

「雷纏大壮」

自ら落とした雷撃を身に纏い、帯電状態と化した悠一の身体は蒼く輝き、周りにスパークを伴っている

「悪いが少し本気で行かせてもらおうぞ」

悠一がそう告げると、忽然と姿を消し、次の瞬間、ザフィーラが吹き飛び、隣のビルと衝突した

「ザフィーラ！…っ!?!」

ザフィーラのもとへと行こうとしたヴィータは悪寒を感じ、防御魔法を発動すると、悠一が振るった大太刀がぶつかり、火花が散る

「相変わらず、その状態は理不尽なぐらい速いな」

「それに反応できる、ヴィータも凄いいけど…な」

防御魔法と罅迫り合いをしていた悠一は一瞬でヴィータの背後に移動し、大太刀を振り下ろすが、間に入ったシグナムが剣と鞘で悠一の一閃を受け止めた

「ぐう!?!」

だが、帯電状態であるがゆえに、大太刀越しで電気が体中を走り、シグナムの身体が痺れる。体が痺れ、思うように動かせないのを理解している悠一は一気に攻めようとするが

「テオオオオ！」

「ぶち抜け——!!」

背後からザフィーラ、真上からヴィータが攻撃を仕掛ける

「…千鳥流し」

2人の渾身の攻撃が届くよりも速く、悠一は自分を中心に雷撃を全方位に放出させ、攻撃と電気による麻痺効果の2つを同時に行う

「引天」

「これは」

「身体が」

「引き寄せられ」

悠一は重力魔法で身体が痺れうまく動かせない3人を指定した場所に引き寄せ、一か所に集める

「疾風と雷光よ。一つとなりて敵を穿て」

構えた大太刀の刀身に風と雷の力が集約する

「風雷劔」

そして、大太刀を動けないシグナム達に向け突き出すと切っ先から風と雷の力が一つとなった魔力の砲を放った。光は3人のすぐ横を通り抜け、結界にあたり結界を破壊した

「……今ので俺のお仕置きは終わりだ。あとははやてに任せる」

3人の拘束を解いた悠一は霊装の展開を解除し、お仕置きは終わりだと告げる

「帰るぞ。何でこんなことをしているのか包み隠さず、教えてもらうからな」

そう言うと、悠一は気を失った明日奈、クリス、アリシア、フェイトの4人を回収すると空間魔法で家までの門を開くと、家に帰った

集う者達

「つまりこういうことか？小さいころからともにあつた夜天、基闇の書が絶えずはやての魔力と肉体に負担を与え、蝕んでいた。そして、書の封印が解かれ活性化し、お前達守護騎士が出てきたことにより魔力に消費が増し、にもかかわらず魔力を蒐集していなかったからはやての病状が悪化した」

「それを知った皆は私との約束を破って魔力の蒐集を始めた。そういうことやね？」

「「「・・・はい」」」

床に正座して事の顛末を説明するシグナム達の話聞いていた悠一とはやては事情を復唱して尋ね、シグナム達は静かに答えた

「はやてを救うために魔力を蒐集していたのは解ったが、一言相談して欲しかったな」

「ユウ君の言う通りや。たとえば私の病気を治すためとはいえ誰かの犠牲の上で治したくない」

「とにかく、明日奈、クリス、フェイト、アリシアの4人にはあとで謝れよ」

気を失った4人は治療を終え、2階の客間で眠っている

「しかし、こいつ（夜天の書）に呪いなんてものあつたか？これはもともと魔法を記録し、研究するための資料本だっただろう？」

悠一は自分とはやての間に浮かび上がっている夜天の書を手に取り、シグナム達に尋ねる

「それが我らにも解らないのだ。気が付けば書は今のようになっていたのだ」

「俺はそういう系の魔法は苦手というか覚えてないからどうなっているのか解らん。あいつなら何か知ってそうだがな」

悠一は最後の守護騎士の一人を思い浮かべる

「あいつ?」

「そういえばはやてには言つてなかつたな。あたしら同様、主であるはやてを守る存在であると同時に主をサポートする奴がいるんだ」
「我らのシステムを含めて書のすべてを管理している存在で、管制人格」とも呼ばれています」

「へえ〜そんな子がまだおるんか」

ヴィータとシグナムの話聞いてはやては最後の騎士の1人に早く会ってみたいと思う

「書の完成ははやての病気が治ることは解つた。つで?今どれぐらい埋まっているんだ?」

「あたしが蒐集した2人の魔力で333ページまで埋まつた。あと、半分だ」

「なのはちゃん達に協力を頼んでページを埋めるか。あの子達なら事情を話せば協力してくれるだろう。あとはフェイトや明日奈達にも事情を説明して協力してもらおう。管理局が動き出す前に事を終わらせよう」

今後の方針を悠一が考えていると

「あ〜悠一、そのことなんだが」

「ん?どうした...つてまさか?」

「...そのまさかだ。書の完成を焦るあまり、あたしら局の魔導士を襲つて、魔力を蒐集してたんだ」

「...ガッデム」

ヴィータの話聞き、悠一は自分の考えたプランがうまくいかないことに気づき、天井を見上げた

「エイミー、地球での拠点は抑えたのか?」

「もっちゃん」

悠一が頭を抱えていたとき、リンディ・ハラウンが艦長を務める次元艦「アースラ」が地球に向け進路をとっていた

「(近頃、頻繁に起きている魔導士襲撃事件。その事件は地球を中心に行われている。襲われた局員の起こった共通点はリンカーコアの一時的な衰弱)」

クロノは捜査資料を見ながら推理をしていると、脳裏にあることが浮かび上がった

「(確か、11年前に起こった事件も今回と同じケースだった。まさか)これも運命なのかもしれないな」

仮面の監視者との戦い

「はい、はい、分かりました。なのはちゃん達には私のほうから伝えさせていただきます」

映像通信を終えた明日奈は部屋から出てリビングに来ると悠一の反対側のソファアームに座る

「ついで?どうだった?」

「局員襲撃事件の担当になったって。数日中には地球に来るみたいだよ」

「はあ~~~~~」

明日奈の返答を聞き、悠一はとても、とても大きなため息を吐いた。目が覚めた明日奈達に悠一ははやて、シグナム達を加えたメンバーで事の経緯を話した。話す際、一部のメンツでの一悶着合ったが、時間がないために物理的に沈めた。経緯を知った明日奈達は強力を約束し、なのは、アリサ、すずかにも話すと3人も協力してくれることを約束してくれた

「俺以外の全員から魔力を蒐集したおかげで完成まであと一歩、何だが」

「何か心配事でもあるのか?」

歯切れの悪い悠一に隣に座っているクリスが尋ねる

「はやての為に早く夜天の書を完成させなきゃいけないのは解ってるんだが、何ていうか、完成させちゃうとんでもないことになっちゃう気がするんだよ。まあ、ただの勘なんだが」

悠一が悩んでいると

「ゆ・・・ご、ご主人様、お嬢様方、お、お茶のお、おかわりはいいかがですか?」

なぜかメイド服を着、ティーポッドを持ったシグナムが悠一達に尋ねる

「お願いします」

「あたしも」

「あゝゝシグナム？」

「な、何でしょうかご、ご主人様？」

「言いにくいなら普通に名前で呼んでいいぞ」

「そういうわけにはいかな．．．いきません。主から命令されていますので」

「(相も変わらず律儀な奴だよなゝゝ)。まあ、シグナムらしいといえばらしいんだが」

何故シグナムがメイド服を着て奉仕をしているのかというと、はやてからの罰だ。自分や悠一に心配をかけ、さらには他人に迷惑をかけた罰としてはやては騎士たちの主人として4人に罰を与えた。シグナムは見ての通りメイド服を着ての奉仕、ヴィータは風呂上りのアイヌ、及び3時のおやつ無し、シャマルは台所に立つことの禁止、ザフィーラはしばらくの間3食ドックフードである

「大変だなゝゝ」

「．．．．．」

「どうしたの悠一君？」

外の様子を見る悠一に明日奈が尋ねる

「何でもない。ちよつと、散歩に行つてくる。何かいい案が浮かぶかもしれないからな」

そういうと悠一は上着を羽織って散歩をするために外へと出て行った

「．．．この辺りでいいだろう。出て来いよ。それとも無理やり姿を現せてやろうか？」

周囲をぶらぶら歩き、人気のない公園にたどり着くと、悠一は虚空に向け話しかける

「・・・気づいていたのか？」

すると、周囲の風景がぼやけ、仮面をつけた男が姿を現した

「最初からな。俺がはやての家に居候し始めたときから視線は感じていた。週に一度感知していた視線が、夜天の書が目覚めてから毎日と来た。いい加減うっとおしくてな」

「貴様、何故闇の書の本来の名を知っている!？」

男は悠一が今は知られてはいない闇の書の本来の名を知っていることに驚き、声を荒げる

「・・・どうやらアンタは色々と知っているみたいだな。ちょうどいい、知っていること全部はいてもらおうか」

「それはこちらのセリフだ」

悠一は“宝物庫”から一本の棒を取り出す

「棒？あの剣ではないのか？」

「ストーカーしてるだけあって俺の得物も知ってるって訳か。こっちのほうが適度に痛めつけられるからな」

「ふん、ただの棒で何ができる」

「何でもさ」

仮面の男の挑発に悠一は不敵な笑みを浮かべながら縮地で接近し、棒を振るう。仮面の男は腕をこうさせて棒を防ぐが、その防御を通り越して謎の衝撃を受け男の身体をふらつかせる

「な、何だ!? 衝撃が仲を通って」

「つぶ。おらあー」

何が起きたのか解らず、ふらつく男を見た悠一は笑みを浮かべながら巧な棒捌きで突き、薙ぎ払いなどといった攻撃で男を攻撃していく。悠一が振るっているこの棒、正式な名称は“如意金箍棒”。悠一が異世界トータスで友と共に作成したアーティファクトだ。魔力を衝撃に変換できる能力が付与されており、棒が触れると同時に魔力が衝撃波に変換されるのだ。だから例え、棒による攻撃を防いでも変換された衝撃波によるダメージを受けるのだ

「おいおい、さつきまでの威勢はどうした？それとももう降参か？」
手元で如意金箍棒を回しながら問いかける

「そんなわけないだろう！」

仮面の男はふらつく身体に鞭を打って立ち上がり、悠一に突っ込む。愚直に突っ込んでくる男に不信感を抱きながらも悠一は棒で突きを放つ

「ぐう!？」

その突きを男は防ごうとせず、身体で受け止めた。棒による打撃と続いてくる衝撃波を耐えると、男は両手で棒をつかみ取る

「(この男、こうするためにあえて攻撃を受けたな)」

「これで、もうこの棒は振るえない。今までの分、存分に返させてもらうぞ！」

男の周囲と悠一の周りに無数の魔力球が形成させる

「.....」

悠一は棒の右に捻ると「カチャ」という音が鳴り響く。そして次の瞬間、男と悠一の周りに形成されていたすべての魔力球が粉々に砕ける

「な、なに!?!がは!？」

突然のことに男は驚くが、右側頭部から衝撃に身体をふらつかせる。失いそうな意識を何とか繋ぎ止め、何が起きたのかを確かめると、鎖と?がれた棒の先端を鎖鎌のように回転させる悠一を見た

「残念。これは三節痕のように分割させて使うことも出来るのさ。んじゃ、チャオ」

悠一は回していた棒の先端を男の額に向け投げ飛ばす。回転による威力向上と衝撃変換によって、男は意識は今度こそブラックアウトした